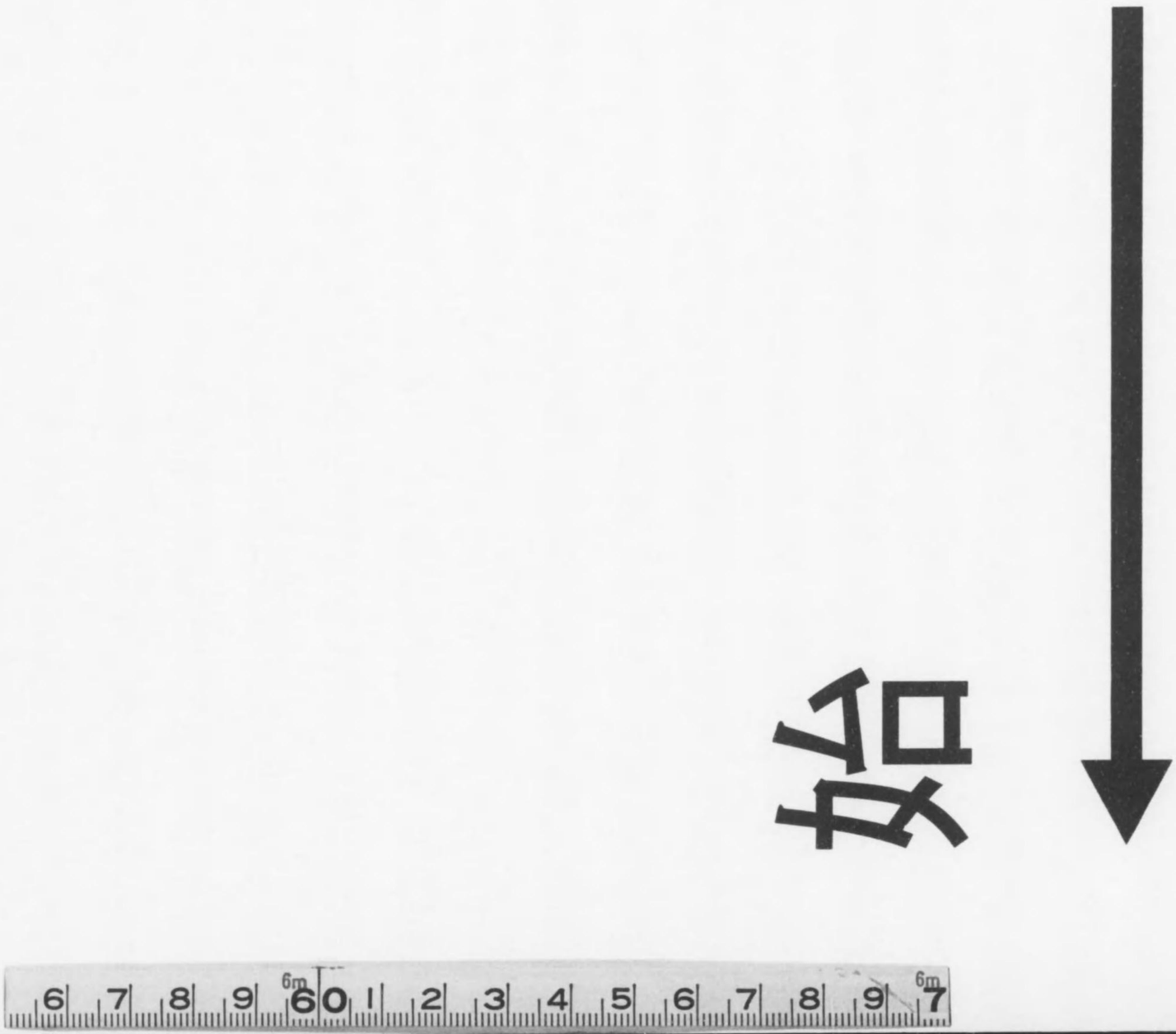


344
9
344-26
1200501401325

344
26

大島正健著

# 韻鏡音韻考

株式會社啟成社藏版

# 韻鏡音韻考

明治
45. 6. 3
內交

# 自序

**韻鏡**の原書は、何れの人、何れの處、何れの年の著作なりしか、今明かに知ること能はず。其著者は悉曇の道に精通せる梵僧なりしが如し。其年代は七音と二百六韻との關係より推して、晩唐の頃なりしなるべしと考ふるは、學者の意見の粗一致する所なり。其音は江左音なりと云へる説あれど、此説尚疑の存する所あり。漢土に於いて、宮、商、角、徵、羽の律に配するに、脣、舌、牙、齒、喉の五音を以てせしこと、其由來遠し。魏の李登の聲類は、其名を知れど、未だ其物を審かにすること能はず。六朝の頃より、韻學の研究其道を進め、齊梁には四聲の區別あり、隋唐には二百六韻の分類あり、唐末に至り五音は更に七音と爲りて、三十六字母を備へ、而して音韻圖は之に從ひて作製せられたるものゝ如し。**韻鏡**を以て**切韻指掌**、**切韻指南**其他の切韻圖に比較するに、圖中に載りたる文字

の、同一にして同様に配置せられたる者、甚だ多きを見る。因りて意ふに音韻圖は昔し諸本に通ずる原圖ありて、韻鏡は之を基として考案せられたる者にして、決して一家の創見より成りたる作にはあらざるべし。尤も後世諸家の改刪を經たる書には、切韻圖より移し入れたるものならんかと思はるゝ字も多くして、何れが原本の韻鏡に近かるべきか今判じ難し。此書後本國に傳はらずして、遠く我國に行はるゝに至りしは、奇なりと謂ふべし。

韻鏡の我國に傳はりしは、龜山天皇の御宇、文永年間にして、其傳來は遠しと雖も、其研究の盛に行はるゝに至りしは、德川の初期寛永の頃よりなりとす。宥朔、太田、湯淺、盛典、馬場、毛利、河野其他の諸家、其解釋に力を盡くしたるも、未だ到らざる所多かりしが、延享の頃、斯道の大斗、無相上人文雄出でて、磨光韻鏡を著はし、杭州音を基礎として、新研究の法を試み、大に韻鏡の眞價を發揚せり。

著者は音韻學に造詣深く、之に關する著書亦尠からず。後の韻鏡を學ぶ者、主として**磨光**本に由るを見れば、其功勞顯著なるを知るに足るべし。

本居宣長氏は**韻鏡**に由りて漢字の音を糺し、開合を以て阿行和行の假名を分ち、又於遠の所屬を明かにせり。氏の**字音假字用格**出でてより、**韻鏡**の用法に新方面を開くに至れり。本居氏に次ぎて其名の高かりし**漢吳音圖**の著者太田保氏は、當時の音韻學の大家なりき。其**漢吳音微**は、和漢古今の書に照らし、細微に亘りて綿密なる考證を立て、該博にして精確なる學識は、人をして驚歎せしむるに堪へたり。第十一轉を開轉なりと斷じて、本居氏の於の字開合に亘るといへる說の誤を正したるは、假名使用の道に大功ありといふべし。然れども、漢吳兩音共に、各字につき原音、次音、轉音、俗音等の別を設け、自ら立てたる法則に拘泥して、混雜を

生ずる基を起すに至りしは、甚だ惜しむべし。又喉音影喩第一、第二、第三の等は、阿王兩行の格、第四等は耶行の定位なりと斷じたるは、人呼んで先人未發の卓見と稱揚する者あれど、是は影喩兩母の配置の原則に協はざる見解なり。白井檢校の**音韻假字用例**を觀るに、全く此說のために誤られたるもの丶如し。又後進者は**漢吳音徵**に負ふ所、甚だ多しと雖も、年代遙かに隔たりたる音韻を混同して、**韻鏡**の說明に臆斷を試みたるは採るべからず。

天保年間に、大澤賚氏は**韻鏡發輝**を著はし、自家の意見を發表せり。其說採るべきもあり、採るべからざるもあり。其音圖は最新の作なりと雖も、未だ深く信賴するに足らず。博學多識なる岡本保考氏は、**韻鏡考**の著あれど、未だ氏が**韻鏡**其物に關する意見を詳かにすること能はず。黑川春村氏の**韻鏡考證**は、久しく其名を聞き居れど、未だ一見の便を得ざれば、今尙其說を窺ふこと能はざ





るを憾とす。

始め**韻鏡**に註せし者、張麟之が序文の說明に力を用ゐ、其說に從ひて、**韻鏡**を反切の書と見做し、反切十二門法の解、九弄の辯、人名反切の法に、勞を費やしたること多かりしが、後の學者其妄を排して、**韻鏡**の本領は、反切に由らずして、直ちに文字の音韻を示すにあることを說けり。然るに之に附したる國字假名に誤謬多く、又漢音吳音に訂正を要すべき所ありて、之を正すに**韻鏡**其物に由る必要起り、**韻鏡**は其功用忽ち一轉し、字音の假名の正否を判ずる根據と爲すべき、唯一の寶典と爲るに至れり。

爾來百有餘年の久しきに亘り、**韻鏡**を講ずる人多しといへども、其眞相に至りては、未だ能く世に紹介せられざるもの丶如し。**韻鏡**は晚唐の作なりといへば、之を研究する要は、其時代の音韻を探るにあるなり、之を探らんとせば、宜しく先づ、七音三十六字母

の性質、及び二百六韻の性質を明かにすべし。古代の音は、今代の音を以て律し難きは、論を要せざれど、現代の支那諸州の音に基づき古音の系統を原ぬるときは、參考と爲すべき事少しとせず。之に加ふるに、和漢對譯、梵漢對譯の如きも、亦側面より光を與へて、進路の方向を照らし示すべし。我漢吳兩音も、此韻鏡の力を借り、適當の方法を用ゐて、之を還原せば、其原音を察し得ること難きに非ざるなり。此に於いてか、韻鏡の眞價大に發揮せられ、再び新意義に於いて、音韻學の寶典と爲ることを得べし。不肖の身此目的に達する新路を開かんことを試み、韻鏡音韻の法則研究の結果、聊か發明する所あるを覺え、玆に此書を著はして世に公にす。

明治壬子元旦

著者　大島正健識

# 韻鏡音韻考　目錄


第一章　七音考……一頁
第二章　內轉外轉の解……一五頁
第三章　開轉合轉の解……二一頁
第四章　等韻直拗の說……二九頁
第五章　二百六韻考……七五頁
第六章　音韻圖使用法。漢吳音還原法……一五三頁
第七章　韻鏡と假名遣……一六五頁
第八章　韻鏡と反切法……一七一頁

# 韻鏡音韻考

大島正健著

## 第一章　七音考

韻鏡は韻を以て經とし、音を以て緯とし、縱横に文字を排列する圖を作り、一目して其音韻を明かならしむるため、四十三轉の分類を設く。

音は脣、舌、牙、齒、喉の五種に、半舌、半齒の二種を加へて七種と爲し、之を清、次清、濁、清濁の四類に分ち、又其中に輕重あるものありて、三十六字母を以て之を代表し、韻には平、上、去、入の四聲ありて、之を開、發、收、閉の四等に分ち、次第を立てゝ二百六韻を排列す。

七音に屬する三十六字母は、其音に近似せる羅馬字を以て寫せ

ば、大略左の如くなるべし。支那音と英語の音とは、其性質に於いて異なる所多きが故、單に羅馬字のみに由りて、誤られざる様宜しく注意する所あるべし。

七音三十六字母表

| | 清 | 次清 | 濁 | 清濁 | 清 | 濁 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 重脣音 | 幫 p | 滂 p' | 並 b | 明 m | | |
| 輕脣音 | 非 f | 敷 f' | 奉 v | 微 ṁ | | |
| 舌頭音 | 端 t | 透 t' | 定 d | 泥 n | | |
| 舌上音 | 知 t̃ | 徹 t̃' | 澄 d̃ | 孃 ñ | | |
| 牙音 | 見 k | 溪 k' | 群 g | 疑 ng | | |
| 齒頭音 | 精 ts | 清 ts' | 從 dz | | 心 s | 邪 z |
| 正齒音 | 照 t̃s | 穿 t̃s' | 牀 d̃z | | 審 s̃ | 禪 z̃ |
| 喉音 | 影 i | 匣 i' | 喻 y | | 曉 h | |
| 半舌音 | | | | 來 l | | |
| 半齒音 | | | | 日 j | | |

**清、次清、濁、清濁、**

清音、濁音の別は說明の要なかるべし。

次清音は出氣音なり。即ち口腔内の障碍を破りて、息の急促に口外に出づる音なり。清音を寫す羅馬字の右肩に、'の符號を附して之を表はす。清音幫のp、端のt、見のkに對し、次清音滂をp'、透をt'、溪をk'と記するが如し。又ph th khの如く、hを以て出氣音を表はすことあり。

清濁音は、聲の鼻孔に通ひて出づる音なり。明のm、泥のn、疑のngの如し、又或は聲の舌に遮られ、上顎に觸れて出づる音をも云ふ。喻のy、來のl、日のjの如し。此音韻會に次濁音と曰ひ、切韻指掌に不清不濁と曰ひ、切韻指南に半清半濁と曰ふ。

我漢吳兩音には次清なく、皆之を清に移す。濁と清濁とは、吳音は韻鏡に從ひ、漢音は之と異なり、その濁を清と爲し、その清濁を濁と爲す。官話、廣東音共に濁なし。厦門音は粗漢音に類す。

**脣音**に輕重の別あり。重く兩脣を結びて、而して發する音を重脣音と爲し、輕く兩脣を合はせて、而して其間より發する音を輕脣音と爲す。

重脣音の幫はp、滂はp'、並はb、明はmなるべきこと疑なし。輕脣音は非にf、敷にf'、奉にv、微にṁを當つ。此音は今の支那音に徵して考ふるに、合脣音なるが如し。元來英語のf vは半脣音なるが故、合脣音に對して、之を用ゐるは、精確ならずといへども、適當の字無きが故、止むを得ずして借用ゐたるなり。清濁音は、mの頭に・を附し、ṁと爲して之を表はす、即ち輕脣音中の鼻音なり。官話にては之にwを當つ。

**舌音**に舌頭音、舌上音の二種あり。之に又輕重の別を立てゝ、上を重、下を輕と爲す。

舌頭音は、舌頭の上顎の前部、或は齒槽に觸れて出づる音なり。端のt、透のt'、定のd、泥のnこれなり。

舌上音は、舌頭音を生ずる舌の位置の變はり、舌身の上顎に觸れて出づる音なり。舌頭音の羅馬字の頭に、〜の符號を附し、知を t̃、徹を t̃'、澄を d̃、孃を ñ と爲して之を表はす。t̃ t̃' d̃ ñ は、t t' d nにyを添へたる、ty t'y dy nyに類する音と見做して可なり。江南音にては ch ch' dj nyを當つ。

**牙音**。

見はk、溪はk'、群はg、疑はngを以て表はせど、此英音は舌根を以て、息又聲を遮りて發する喉音なり。此音既に牙音の名稱ある以上は、その喉音に非ざること明かなり。喉音は口を開きて

發する音なれど、牙音は齒を以て口を閉ぢ、而して後牙の間より發する音なるが如し。されば其の息又聲を遮る場所は、舌根の方に非ずして、舌身に近き位置なるべし。故にk g等の字は、唯借用ゐたるに過ぎず。此音時には純粹の喉音に變はり、牙喉兩音相往來することあり。歐洲語のchにキチ硬軟の別を生じ、**支那官話**に**南京音**k、**北京音**chと爲るも、此牙音の類なるべし。

**齒音**に齒頭音、正齒音の別ありて、上を重、下を輕と爲す。

精、清、從、心、邪は齒頭音の字母なり。案ずるに精、清、從にては、上齒頭、心、邪にては下齒頭に、舌端の觸れて出づる音なるべし。心、邪は又細齒頭音と呼ぶ。**江南音**に徵するに、前者はts ts' dzにして、後者はs zに當る强き摩擦音なり。故に兩清兩濁あれど、清濁なし、又細齒頭音の中に次清無きは、心のsは既に出氣音の性質を有するに由りてなるべし。



照、穿、牀、審、禪は正齒音の字母なり。案ずるに正齒音は、齒頭音を生ずる舌の位置動き、舌身の、上顎に觸れて出づる音なるべし。審、禪は細正齒音と呼ぶ。齒頭音の羅馬字の頭に、〜の符號を附し、照をt͡s、穿をt͡s'、牀をd͡z、審をs、禪をzと爲して之を表はす。t͡s t͡s' d͡z s zは、ts ts' dz s zにyを添へたるtsy, ts'y, dzy, sy, zyに類する音と見做して可なり。**江南音**にてはch, ch', dj, sh, zhを當つ。之を舌上音と分つがため、chをt͡shに改むる方適當なるべし、但し舌上、正齒の兩音、今は明確なる區別無きが如し。正齒音に清濁なきは、齒頭音に同じく、細正齒音に次清なきは、細齒頭音に同じ。

**喉音**の字母、影、曉、匣、喻に、羅馬字を當つるに際し、疑の存するものあり。

今の支那音に由りて、影母所屬の字の音を探るに、亞のa、依の

i、阿のoの如く、皆母韻性の者なり。されば此等の諸字は、各字皆發聲のあるものと假定し、只形式を調ふるため、空位に對して、字母を設けたるものか、或は當時の支那音には、此類輕微なる發聲を備へ居りたるものか、疑の因りて起る所なり。反切を參考するに、亞に衣嫁切、依に於希切、阿に烏何切などとあるを見れば、今の音は姑く措き、昔は何か發聲ありたるものと假定するも妨なかるべし。故に此意味にて、影はiを以て表はすことゝせり。このiは母韻性の者に非ずして、空位を補ふ無聲に均しき者と定め置くべし。

曉は今の支那音を參照し、hを以て表はす。この古音hなりしか、將たkなりしか、之を判ずるに苦しむ所なるが、其實或は兩者の間の音なりしかも計り難く、牙音のkは存ぜしも、喉音のkは存ぜざりしとは、斷じ難かるべし。我漢音、吳音は、之を寫すに加行の假名を以てす。我音も亦純粹の喉音なりしか、將た牙音の類なりしか、容易く判じ難しと雖も、喉音のhを寫すことは能はざりしに由り、之に近似の假名音を附したるべきこと疑なし。

匣は影の清に對する濁なり。影を母韻性の者とせば、之に對して匣の如き濁を生ずること其意を得ず。**江南音**に徵するに、匣母所屬の字は、鞋の\a、痕の\en、下の\oの如く、母韻の左肩に出氣の符號を附して之を寫す。されば匣は影の次清と爲るべし。支那の出氣音は、渾然として濁音の如く聞こゆることあり。分けて喉音の清濁は、餘音に類せざれば、若し影に前に述べたるが如き發聲ありたりとせば、匣を濁と見做すこと妨なかるべし。我**吳音**にては、此類下のゲ、行のギャウ、降のゴウの如く、濁音にて記するを定則とす。又會のェ、和のワ、横のワウの如く、合口音

のときは、其儘和行の假名にて寫すことあり。姑く古今の音を考へ合はせ、匣は影のiに出氣の符號を附し、ĩと爲して濁音を表はすことゝせり。**官話**にては、匣は曉と等しくhなり。曉匣雙飛、又曉匣往來等の名目の、韻書に記載しあるを見れば、早くより兩者混同の傾向ありたるものゝ如し。**我漢音**にては、兩者共に加行の假名を以て之を寫す。影曉共に清なるは如何。曉は影に比すれば硬聲なるべかりしに由り、匣を既に變態の濁なりとせば、何故に曉を變態の次清と爲さゞりしか、別に深き理由なかるべし。**玉篇指南**、**韻學集成**、**康熙字典**には、之を次清と爲す。案ずるに曉を清と爲すは、後世に至り、出氣の力の失せたるに由ることとなるべし。匣は曉よりも其勢尙一層銳く、遂に濁の如く聞こえたるものならん。**中原雅音**に、曉匣を一にしたるは、匣の硬聲の稍蠻音の如くきこゆるを嫌ひて、曉の如き稍軟かなる聲に化せしめたるものならん。これいはゆる元時代の都音なるべし。**官話**の如き、**廣東音**の如き、又我**漢音**の如きは、此系統に屬するものと見做すべきか。

喩は之にyを當つ、然れども英語のyは、喉音とは見做し難きに由り、是も亦借用ゐたるに過ぎず。曉匣の一雙を爲すが如く、影喩も亦一雙を爲して相通ぜり。今の支那諸州の音にも、亦かゝる例多く。**官話**、**江南音**、**廣東音**に於いて、影の倚も、喩の以も、共に均しく同音なるが如し。影の幽、喩の由の如きも亦然り。匣喩往來も其例無きに非ず。**江南音**にて、爻の yao と爲りて喩に移り、**官話**にて雄のhuingと爲りて匣に入るが如し。右の外牙音の疑の、影喩に通じ、齒音の邪の、喩に轉するが如きも其例あり。

來日の二母は、清濁音に屬し、來を半舌音、日を半齒音と呼ぶ。

**半舌音。**

今の支那音を寫せる羅馬字を參照するに、來はlを以て表はす。案ずるに來は舌端を上顎に當て、聲を其兩側より洩らして、發せしむる音なるべし。

**半齒音。**

日は我音にては精確に寫し得べからざる最も解釋に困難なる音なり。此字母に屬する者は、**漢音**にては佐行濁音、**吳音**にては奈行の假名を用ゐるを定則と爲す。人、如は**漢**ジヌ、ジョ、**吳**ニヌ、ニョと記するが如し。これ齒音の禪、舌音の孃に對する假名と異なる所なし。**江南音**にては、此類の中zh音あり、ny音ありて、或は禪に通じ、或は孃に通ず。その禪に通ずるに當り、澄牀所屬の者、之に伴ひて混入することあり。**廣東音**にては、日は喩に移る、柔をyau、人をyanと呼ぶが如し。**厦門音**にては、日は來に通ひ、爾をli、人をlangと唱ふ。**官話**に對しては、通例jを以て寫せど、又rを用ゐることあり。日兒曼の日兒の音の如し。

以上諸種の變化より考ふれば、舌端を齒の方より動かし始め、口腔內にて稍之を上方に曲げ、更に舌身を上げて、發する音なりしかと察せらる。かゝる不定の位置なるが故、舌の運動僅かに其處を變ふれば、舌上音、正齒音、喉音、半舌音と轉じ行くものなるべし。日は**官話**の記法に從ひて、jを以て之を表はす。英語の發音に由れば、このjは本濁音の性質なれば、適字ならずといへども、姑く借用ゐて其位置を塞ぐ。

## 第二章　內轉外轉の解

內轉とは、一等にo(オ)、一等缺位のときは、二等以下にo(オ)、u(ウ)、若しくはi(イ)の母韻ある者を言ひ、外轉とは、一等又二等にa(ア)、三等、四等にe(エ)の母韻ある者を言ふ。開合對次する兩轉にては、

內外の別同一にして、合轉は開轉に從ふを定則と爲す。

內轉の特徵左の如し。

一、二等には正齒音のみ位することを得れど、他の諸音は之に伴ふこと能はざること。

二、第二十二轉と第四十一轉とを除く外、輕脣音は內轉にのみ存して、外轉に屬せざること。

三、匣母は三四の兩等に現はれざること。

四、第三十七轉を除く外、來母は四等に現はれざること。

內轉を分ちて二類と爲す。

第一類は二等以下にo(オ)、u(ウ)の母韻ある者なり、第一、第二、第十一、第十二、第二十七、第二十八、第三十一、第三十二、第四十二、第四十三の諸轉これなり。以上の諸轉につき、注意を要すべき件あり。

一、第四十二轉を除く外、諸轉を通じて脣音は輕母なること、但し第一轉の清濁音は重母なり。

二、諸轉を通じて、四等は脣、舌、牙の音なく、常に存するは、齒音と喉音の喩母のみなること。

第二類は二等以下にi(イ)の母韻ある者なり、第四、第五、第六、第七、第八、第九、第十、第十七、第十八、第十九、第二十、第三十七、第三十八の諸轉これなり。以上の諸轉につき、注意を要すべき件あり。

一、第十、第二十、第三十七の三轉を除く外、諸轉を通じて脣音は重母なること、但し第三十七轉の三等にては、清濁音のみ重母なり。

二、第九、第十、第十九、第二十の四轉を除く外、四等に脣、舌、牙、齒、喉の諸音の現はれ得ること。

右兩項より推して、第九、第十、第十九、第二十、第三十七の諸轉は、其響の軟かなりしを察し得べし。

第一類と第二類との特徴を對照するときは、第一類の諸轉は、第二類の諸轉に比して、其諸韻の響の弱かりしを示す。

第二十七、第二十八の兩轉は、**韻鏡**の諸本、之を內轉の部に置くを常とすれど**發輝**は**切韻指掌**に據りたるものと見え、獨り之を外轉の部に置けるが、其は和漢對譯、梵漢對譯に由りて見るが如く、韻の響にa(ア)の聲あるが故なるべし。今の支那諸州にては、o(オ)の聲多し。**韻鏡**の音は、當時既に之と同一なりしものゝ如し。

第三十一、第三十二の兩轉は、內外所屬につき疑の生ずべき所あり。和漢對譯、梵漢對譯共にang(アング)の韻なるを示す。然りとせば、是は外轉に屬すべき筈なり。又**正韻**、**字彙**等に、陽の韻は、北音にてyáng(ヤング)の聲なりし、江の韻と相通ひたるを見る、是亦外轉なるべきを證するに似たり。**切韻指掌**も亦陽江を同





轉の中に置けり。然るに細かに此兩轉の性質を探るに、悉く內轉第一類に屬すべき條件を具備す、因りて此兩轉所屬の韻の聲は、**江南音**の如くôngの聲なりしと斷定す。

**切韻指掌**の古韻十六攝に、臻攝即ち第十七第十八兩轉に屬する韻を、外轉の中に置けど、今其理由を窺ふこと能はず。或は其當時on(オン)、in(イン)の、an(アン)、en(エン)と響きたるに由るものか。**磨光**始め之を內轉と爲し、後外轉に改めたるは却て非なるべし。

外轉は一等、二等にa(ア)、三等四等にe(エ)の母韻を備ふること、既に述べたるが如し。第三、第十三、第十四、第十五、第十六、第二十一、第二十二、第二十三、第二十四、第二十五、第二十六、第二十九、第三十、第三十三、第三十四、第三十五、第三十六、第三十九、第四十、第四十一の諸轉これなり。外轉の特徴左の如し。

一、脣、舌、牙、喉、半舌の五音は、齒音と共に二等に位し得ること。
二、脣音は、二等にては全部、三等にては第二十二、第四十一の兩轉を除く外、重母なること。
三、匣母は內轉と同じく、三等には現はれざれど、之と異なり、て四等には現はれ得ること。
四、來母は四等に現はれ得ること。
五、內轉の、三等に勢力あるに反し、外轉は、二等に勢力あること。
內外兩轉に屬する所の、諸韻の性質を對照するに、內轉の方は、其響輕くして弱く、外轉の方は、其響重くして强し。內轉外轉の別は、吸音呼音の別と同樣なるべく、內轉の韻は即ち吸音、外轉の韻は即ち呼音に當るべし。
晚唐初宋の頃よりは、遙かに下りたる、後世の人の作製せる韻圖に、內外の別を設けたるものあるは、能く其書と同時代の音を代表せるものか、或は只古法に則れるものなるか、疑の存する所なり。

## 第三章　開轉合轉の解

四十三轉を通じて、開合常に相對次す。開合を分つは、主として音に由るなり。羅馬字にて表はせば、一般に、合の音は開の音にwを添へたる者に當る。p t k s h y l j は開にして、pw tw kw sw hw yw lw jwは合なるが如し。開のyi(イ)に對する、合のywiより yui(ユヰ)、開のsi(シ)に對する、合のswiより sui(スヰ)、開のtin(チン)に對する、合のtwinより chun(チュン)と爲るも、音稍轉ずと雖も同例なり。總べて合には、wiのuに變はれる者多し、雲のywyinは yunと爲り、我音にてはyを取り、wを殘して、wun(ウン)と變はり、之を漢音阿彌陀經にてはヰン(win)と記せり。榮のywyeng(ヱイ)に對する、今音ywyingは、

官話 yung と爲れど、廣東音にては、y を取りて wing と變はる。因りて支那音の yun, yung 等は、其性質合口音なるを察すべし。ywy は yyw と記して說明するも、便宜上妨あること無し。

o(オ)、u(ウ)の聲に伴ふ、輕微なる合口音には、w を略して用ゐざることゝせり。第十二轉の都を two と記せずして、to と記し、儒を jwu と記せずして、ju と記するが如し。されど時には假名遣に關係して、喉音影母所屬の字の如きは、合の標記なる w を附すべき要起ることあり、烏を wo, 紆を wu と記するが如し、但し此轉の o(オ)は、u(ウ)に近き聲なりと知るべし。

脣音は合口の發聲なるが故、之に屬する開轉の韻の字にして、往往合轉の韻に紛るゝことありて、磨光外數本に、開轉の字を取りて合轉に移せる者あり。是は彼爲切皰、步光切傍、兵永切丙の如き、韻字の合聲なる、廣韻の反切に重きを置きて、誤られたるものなるか、或は同樣の解釋を施せる、後世の支那人の作製せし、韻圖に據りたるものなるべし。今舊本を參照して、皰糜彼殈被靡を第四轉に、非、眉、鄙、豳、否、美を第六轉に、褊、緬、扮を第二十一轉に、幫、傍、螃を第三十一轉に、丙、皿を第三十三轉に置く。又反對に合轉に入るべき字を、開轉に移せる者あり。今之を改めて、慢、八、汎、拔、儲を第二十四轉に置く。

第一、第二の兩轉、開合疑あり。諸書或は之を開と爲し、或は之を合と定めて、決する所なし。今外證に由らず、內證を用ゐて、判斷を試むべし。

四十三轉の中、開合相對次する諸轉を通覽するに、最も顯著なるは、三等四等の存する韻にては、一般に開轉は喩母の下四等は字ありて、三等は空位なれど、合轉は三等に字を備ふることなり。今第一、第二兩轉の喩母の下三等四等を見るに次の如し。

内轉第一　雄融　○○　趙○　囿育
内轉第二　○庸　○勇　○用　○欲

是に由れば、第一轉は合、第二轉は開と判ぜざるを得ず、又兩轉所屬の韻の性質を考ふるに、第一にては三等は yung, 四等は ong なりしが如し。是亦第一 ung, 第二にては三等は yong, 四等は ong なりしが如し。是亦第一轉は合、第二轉は開なるべきことを示す。第一轉も、第二轉も、共に一等は ong なれども、第一の方は、其三等韻の響より推せば、この ong は、寧ろ ung に近き聲なりしかと察せらる。第一轉は至つて輕微なる合口音なりしが如ければ、我假名遣に影響を及ぼす程には非ざるべし。故に本居氏の**字音假字用格**に記するが如く、翁をチウ、屋をチクと爲さずして、白井寛蔭氏の開轉說の如く、翁をオウ、屋をオクと爲して、妨なかるべし。羅馬字にて w を略す。第一第二兩轉共に**官話**は ung にして合に傾き、**江南音**は、ong にして開なるを示す。

第三轉は諸本之を開合と爲す者多し。一說に脣、牙、喉を開、舌、齒を合と定むれど、此說取る可からず。此轉は七音を通じて皆開なりと斷ず。江の韻の yang は、南音の yong の如く、長く響く傾向ありて、爲に開合の間にきこえたるものか。

第十一轉の開なるべきこと、漣窩の**古義之**を示し、**漢吳音圖之**に則りて、更にその然るべき證を擧げたり。これ從ふべし。さすれば能く第十二轉と開合相對次す。喻母三等四等の關係も、亦兩轉の開合相符合す。

第三十七轉は、諸本開に作り、**發輝**合に作る。此轉の韻の一部は、第一轉及び第十二轉に通ふを見れば、合轉說を確かむるに似たり。然るに他の一部は又第二十五轉に通ふを見れば、開轉說を取らざるを得ず。喻母三等、四等に字あり、又二等以下の韻ゥの

聲なれば、此轉の性質第一轉に類似し、合轉說も其理由なきに非されど、姑く舊來の諸本に從ひ、開と爲すこと穩當なるべし。

**發輝**は第二十五轉を開合に作る。

第三十八轉は開に作るあり、合に作るあり、開合に作るあり、諸本一定する所なし。韻尾の脣內撥音ム(m)、同促音フ(p)を有てる者は、合なりとの說あれど、杜撰にして信ずるに足らず。此轉は第十七轉に類するを以て、無論開なるべし。

第三十九、第四十の兩轉は、舊本多く開に作る、**磨光**之を合に改む。韻尾ム、フなるに由り合なりと云ふ說は採る可からず。蓮窩第三十九轉を開、第四十轉を合に作る。是は能く開合對次の順序に協ひて、從ふべきに似たりといへども、未だ第四十轉の合なるべき性質を見出だすこと能はず。喩母三等、四等の關係も、合と爲すべき特徵なし。因りて姑く第三十九、第四十の兩轉を開と爲す。

第四十一轉は舊本開に作る者多しと雖も、**古義**、**磨光**、**漢吳音圖**等に從ひて合と爲す。此轉は韻尾ム(m)、フ(p)とヌ(n)、ツ(t)との差異にて、第二十二轉に類し、合なるべきこと論なし。

後世の韻圖、例へば**康熙字典**、**切字肆考**に擧げたる者の如きは、古韻十六攝の、一等二等を、開口呼、合口呼に分ち、三等四等を、廣、通、偏狹の四門に分てり。是は**切韻指南**の名目に由りたることなるべし。この廣、通、偏、狹の別は本論には大なる關係無きが如く見ゆるが故、之を省きて說かず。

又呼法に開口、合口、撮口、捲舌、咬齒、齊齒等の類あれど、其說明繁雜に亘り、却て本論に關係少きを以て、是亦略して載せず。

## 第四章　等韻直拗の說

韻鏡は韻を分ちて、之に開、發、收、閉の名を設け、一、二、三、四の等位を定む。各等に位する韻を列擧すること左の如し。

一等韻。

冬　宋
模　姥　沃
咍　海　賄　暮
痕　魂　很　混　恨　代　隊　泰
寒　桓　旱　緩　翰　換　曷　末
豪　晧　號
歌　戈　哿　果　箇　過
唐　蕩　宕　鐸
侯　厚　候
覃　談　感　敢　勘　闞　合　盍

登等

二等韻。

江　講　絳　覺
皆　駭　快　夬
佳　蟹　卦
臻　櫛
山　刪　產　潸　襇　諫　鎋　黠
爻　巧　效
庚　耕　梗　耿　諍　陌　麥
咸　銜　豏　檻　陷　鑑　洽　狎

三等韻。

微　尾　未　廢
欣　隱　炘　迄

文　吻　問　物
元　阮　願　月
嚴　儼　敬　業
凡　范　釅　乏　梵
一、二、三、四の各等に位する韻。
東　董　二、三、四缺　送　四缺　屋
二等三等四等に位する諸韻。
支脂之　紙旨止　寘至志　御　遇　禍　樣　藥
魚　語　御
虞　麌　遇
麻　馬　禍
陽　養　樣





尤　有　宥
侵　寢　沁　緝
蒸　極四缺　證二缺　職
三等四等に位する諸韻。
鍾　腫　用　燭
眞諄　軫準　震稕　質術
仙　獮　祭
宵　小　笑　線　薛
清　靜　勁　昔
鹽　琰　豔　葉
四等韻。
齊　薺　霽

先　銑　霰　屑
蕭　篠　嘯　徑　錫
青　迥　徑
幽　黝　幼
添　忝　㮇　帖

我國の韻鏡を論ずる學者、等位の別に至りては、未だ適當の解釋を與へたる者あるを見ず。卑見を以て案ずるに、四等の別は左の如くなるべし。

一等は a(ア)、o(オ)の聲なり。

二等は ya(ヤ)、yo(ヨ)の聲なり、但し內轉の齒音にては、yi(イ)、yu(ユ)の聲之に上ることとあり。

三等は ye(エ)、yi(イ)、yo(ヨ)、yu(ユ)の聲なり。

四等は e(エ)、i(イ)、o(オ)、u(ウ)の聲なり。

一等と二等とは、直拗兩聲相對し、三等と四等とは、拗直兩聲相對す。一等と四等と、又二等と三等と、同聲の如く聞こゆる者あるは、其別之を母韻の響の强弱に歸すべし。開、發、收、閉の語は、右の區別以上、外に深き意義あるを覺えず。

是より反切を基礎として、等位直拗の別を立つる考證を試むべし。**玉篇**、**唐韻**、**廣韻**、**集韻**の反切に由るに、其別の最も明かなるは、一等と三等とにして、直拗兩聲相混ずること稀なり。宋以降に至りては、反切法漸く精確ならず。元の**韻會**、明の**正韻**等には、其差異の次第に現はるゝを見る。因りて韻鏡との對照には、主として**廣韻**を用ゐ、後世の韻書は取らざることゝせり。

反切に用ゐる所の二字を、上を切、下を韻と言ふ、或は上を父字、下を母字とも言ふ。此篇にては、反切或は字母などと唱ふる所の字義の用法と、混同する恐を避けて、上を音字と名づく、これ七音の

音の義なり、下を韻字と稱す、これ二百六韻の韻の義なり。されば音韻合して、歸字の聲を生ずるに至るなり。漢字は元來單音字なれば、音韻容易く分ち難く、隨つて反切法は綴字法に比すれば不便少からずして、屢、窮屈の感を與ふることあり。理會を助くるため、羅馬字を用ゐて反切を示せど、音韻相摩する所、綴字法とは趣を異にする所ありと知るべし。

歸字は音字と音を同じうし、韻字と韻を同じうするを正則と爲す。音字直聲韻字直聲なれば、歸字は直聲、音字拗聲韻字拗聲なれば、歸字は拗聲なるは、反切の正法音和法に則る者なり。今一、二、三、四の各等に就き、細かに探索すれば、一等の直聲にして、三等の拗聲なること、疑ふべき所なし。反切の音韻兩字に當てたる羅馬字は、韻鏡の音韻を推測して、記載したる者なれば、或は廣韻とは記法を異にする所あるべし。又本論に關係少きが故、四聲の符號は



略して記せず。

一等韻。

先づ一等字を考ふるに、時に例外なきには非ざれど、一般に音字韻字共に直聲の字を用ゐるを法とす。一等には輕脣音、舌上音、正齒音の存在を許さず。其位置に當る者は、重脣音、舌頭音、齒頭音にして、反切に用ゐる音字は直聲なり。韻字も亦一等字にして、同じく直聲なり。

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 博 | p(ôk) | 毛 | (m)áu | 切 褒 páu |
| 德 | t(ok) | 紅 | (i')ong | 切 東 tong |
| 息 | s(ok) | 郎 | (l)ông | 切 桑 sông |

牙音、喉音、半舌音も、音字は直聲なる一等字、若しくは四等字を用ゐるを常とす。

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 苦 | k'(u) | 哀 | (i)ái | 切 開 k'ai |

一　i(it)　　丸　(i')wán　切　剜　iwán
魯　l(o)　　甘　(k)ám　切　藍　lám

右一等字には、我方にてもハウ、トウ、サウ、カイ、ワヌ、ラムの如く、直聲の假名を用ゐること言ふまでもなし。

三等韻。

次に三等字を觀るに、此等には舌頭音のt t' d nを許さずして、舌上音のt̂ t̂' d̂ n̂ 其位を占む。韻字の方も、拗聲にして直聲を許さず。反切の場合には、音字韻字共に拗聲なるが故、雙方に粘着力ある物が、能く相結合するが如く、音韻相摩し、兩拗聲相合して、分離し難き一拗聲と爲る。これ反切法の、綴字法と異なる所なり。羅馬字を以て之を表はせば、拗聲字多きに過ぎ、之を切捨つべき必要起る。反切は音字より拗聲の音、韻字より拗聲の韻を取る。

陟　t̂(ok)　　隆　(l)yung　切　中　t̂ung

女　n̂(o)　　鄰　(l)yin　切　紉　n̂in

此の如く音韻兩者に拗聲あるときは、歸字の聲は、韻の方のyを取り、上記の如くにして表はすか、或は音の方の拗聲の符號を取りてty, nyと爲し、而して後其yを捨て、韻と結びてtyung, nyinとして表はすか、何れにても可なるべし。

齒音にては三等字に屬する音は、齒頭音のts ts' dz s zにあらずして、正齒音のt̂s t̂s' d̂z ŝ ẑなり。此等の字の反切の説明は、全く舌音に同じ。

章　t̂s(ông)　　魚　(ng)yo　切　諸　t̂so
市　ẑ(i)　　羊　(y)ông　切　常　ẑông

市羊切はいはゆる憑切即ち憑音にて、羊は四等字なれど、市の三等字に導かれて、歸字常は三等字となり、ôngはyôngの聲となるなり。

禪母のʒは、三等專屬にて、二等に出づることなし。これ邪母zの一等に現はれざるが如く、二等の力の强き母韻に接すること能はざるに由りてなるべし。牀母のʒ̆は、缺位なる場合多し。これ今の江南音にて見るが如く、牀禪の二母濁音相近く、大方は禪母のみにて事足りたるものと察すべし。

脣音に就いて考ふるに、反切の音字には、三等字を用ゐるを本則と爲すこと、舌音齒音に同じ。此音に屬する三等字も、拗聲なることと聊か其證を示すべし。

逼　py(ok)　　密　(m)yit　　切　筆　pyit

右は韻會の反切にして、逼は冰の入聲なれば、拗聲なること論なし、隨つて歸字は自然の結果として、拗聲となるべし。歸字筆と韻字密とは同韻に屬し、幫母の明母に移りたるのみなれば、密も亦拗聲なるべし。筆は廣韻にては鄙密切なり。されば一般の通則にては、鄙も筆と共に拗聲となるべし。

重脣音のp p' b mは、拗聲に變じて、響の弱きo uの如き母韻に接するときは、其力を保つこと能はずして、輕脣音のf f' v m̃と爲ること常なり。其内mのみは、第一、第三十七の兩轉に於いて見るが如く、原音を維持することあり。脣音の拗聲は、好まれざる所ありたるものと見え、支那にても早くより之を直聲に移したるのみならず、其韻の聲をも變ぜしめたる形迹あり。

方　fy(ông)　　戎　(j)ung　　切　風　fyung

方のfyと戎のyungと相摩し、fyungの聲となれるを、轉じてfungと呼ぶ。

孚　f'y(u)　　袁　(y)wyen　　切　翻　f'wyen

袁のywyenのyuenと爲るを見れば、f'wyenはf'uenと爲るべきを、轉じてf'anと呼ぶ。

右は和音の轉化のみと考ふべからず。今の官話の記法も即ち是にして、風は fung、翻は fan なり。

反切の音字の直聲なること、時には其例無きに非ざれど、此等位にては、韻字拗聲なる以上は、歸字の拗聲なるべきこと、爭ふ可からず。

牛舌音の三等韻も、拗聲なるべきこと疑ふべからず。

力　ly(ok)　　擧　(k)yo　　切　呂　lyo

牛齒音は三等專屬の拗音なり。此音の下にある三等韻の、拗聲なること論を要せず。

牙音、喉音には、字母に輕重の別無しと雖も、反切の音字には、他と同じく三等字を用ゐるを定則と爲すを見れば、此等の字も亦拗聲なるべきを證す。

居　ky(o)　　陵　(l)yong　　切　兢　kyong

其　gy(i)　　立　(l)yip　　切　及　gyip

央　iy(ông)　　居　(k)yo　　切　於　iyo

有　yy(iu)　　乾　(g)yén　　切　濡　yyén

右の中我音のみに由れば、及の字、濡の字の直拗、尙疑あるべけれど、立は力入切、乾は渠焉切なるを見れば、其立、有乾兩反切の韻字は、共に拗聲なるべきこと論なく、其聲は歸字に及ぶことゝ知るべし。

匣母は出氣性なれば、拗聲にして力の稍弱き、三等韻に伴ふことと能はざるが故、此等位に現はるゝことなし。

我漢音吳音にては、三等字に直聲の假名を附することあり、其例の中、漢吳兩音直拗相反することあるは、奇なりと謂ふべし。

| 漢音 | 吳音 | 漢音 | 吳音 |
|---|---|---|---|
| 强　キャウ | ガウ | 興　キョウ | コウ |

呂　リョ　ロ
貞　テイ　チャウ　城　セイ　ジャウ
周　シウ　シュ

合轉の三等韻には、轉聲の説明を要すべき者あり。反切の音韻兩拗聲相摩し、合音のw其間に挾まるときは、音の方のyを取るべきか、韻の方のyを落とすべきか問題なり。其略法の如何により、結果はwyとも、ywとともなるべし。其實は音韻相合して混和したる者なれば、其形は二樣あれど、其音は一なり。故に説明には何れの形を取りても妨なかるべし。

巨　gy(o)　　員　(y)wyén　切　權　gwyén

右は音のyを取りたるなり。韻のyを取れば gywén と爲る。何れにてもgüenに近き聲にて、**官話**のk'iuenと相似たり。**漢音**のヶヌは稍之に遠し。**江南音**のgyönは**吳音**のゴヌに近し。我古音に源氏をグェンジと記せるも、此類の音なりしと知るべし。

許　hy(o)　　榮　(y)wyen　切　兄　hwyeng

hwyeng(hyweng)はhüengと爲りて、其聲**官話**のhiung, **江南音**のhyöngと稍近く、**漢音**のヶィ**吳音**のキャウと遠し。

昌　ʧs'(ông)　　脣　(dz)win　切　春　ʧs'win

ʧs'winはʧs'unと爲り、**官話**のch'un, **漢吳兩音**のシュヌは之に近く、**江南音**のch'enは稍遠し。

於　iy(o)　　非　(f)wyi　切　威　iwyi

iwyiはwyiにて、**漢吳兩音**のヰ、**官話**のweiと聲相通ふ。**江南音**はwaiなり。皆本來は拗聲の在りたるものなるべし。合轉の三等韻にては、折々拗聲を失ふ者ありと知るべし。

二等韻。

二等韻は直聲の一等韻と、拗聲の三等韻との間に位し、其所屬の

字に、直拗何れの聲なるべきか、疑問に屬する者多し。此等韻は元來拗聲なるを、母韻の響の強きに由り、其拗聲を失ひて、直聲に轉ずる傾向を生じたるものなるべし。現に我漢音にては二等字には直聲に響かす字あること少からず。韻鏡にては此等韻拗聲なるべしと信ずと雖も、其拗聲の性質三等韻とは同じからざるが如し。廣韻の反切を見るに、音字は同等字のみに非ずして、他等の字混用の例多し。これ一等三等と大に異なる所なり。

舌音の二等字につき、其反切を比するに、音字は概して三等字にして拗聲なれば、隨つて歸字の拗聲なるべきこと、自然の結果なるべし。左に異様なる例二三を出だすべし。

陟　t(ok)　　革　(k)yak　　切　謫　ťak

謫は漢音タク、呉音チャク、官話tseh, 江南音tsah.

瑒　d(ông)　　伯　(p)yak　　切　宅　ďak

宅は漢音タク、呉音ヂャク、官話tseh, 江南音dzah.

宅　d(ak)　　耕　(k)yang　　切　橙　ďang

橙は漢音タウ、呉音ヂャウ、官話tsang, 江南音dzang.

右は韻鏡と廣韻と相協ひ、呉音之に從ふ。漢音は直聲の舌音の假名を用ゐ、官話と江南音とは、直聲の齒音に移るを見れば、此諸字の拗聲に、落着かざる所ありたるものなるべし。

都　t(o)　　教　(k)yáu　　切　罩　tyáu

罩は漢音タウ、呉音チャウ、官話chau, 江南音tsau.

右廣韻の反切は、音字舌頭音にして、歸字舌上音と爲る、即ち憑韻類隔にして、反切の正法に非ず。韻字教を漢音の如くカウと讀めば、罩はタウとなれど、然るときは一等字となるべし。この去聲字に對する平聲の啁は陟交切、上聲の鯈は張絞切なれば、罩は拗聲なるべきこと疑ふべからず。呉音と官話とは之に從ひ、漢音は舌

頭音、**江南音**は齒頭音にて直聲なり。

次に齒音に屬する二等字に就きて考察を下すべし。內轉に屬する諸韻の多數は、齒音にのみ二等字を備ふる特徵あり、而して其反切を糺すに、一般に音字は二等字にして、韻字は三等字なる、韻字歸字其等を異にする、いはゆる憑切にして即ち憑音なり。案ずるに齒音には他音と異なる結合力ありて、その三等韻の稍響の强き者と伴ふとき、二等韻に類する聲を生じて、遂に獨立したるには非ざるか、然る故にや、音韻の結合稍緩く、時に直聲に變ずる傾向あるを見るなり。二等字、三等字、**官話**にては大方は同形なれど、中には母韻の記法を異にせる者あり。二等字瑟色は seh と記し、之に對する三等字失識は shih と記するが如し。韻字の三等字なる以上は、歸字の拗聲なるべきこと、自然の結果なりといへども、二等字は三等字と異なる聲あるものと見え、假名及び羅馬字の寫し方別樣にして、屢〻直聲を以て之を表はすことあり。

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 所 | sɔ(o) | 追 | (t)wi | 切 | 衰 swi |
| 楚 | tsʼ(o) | 居 | (k)yo | 切 | 初 tsʼo |
| 士 | dz(i) | 尤 | (y)yiu | 切 | 愁 dziu |
| 所 | sɔ(o) | 祐 | (y)yiu | 切 | 瘦 siu |

右は何れも音字二等、韻字三等の反切なり。

衰は**漢吳兩音**の假名スキなり、或は追のチュイをツキと記するが如く、本音シュィの耳障となりて、殊に直聲に寫したるものが、此字**官話** shwái, **廣東音** shui なり。

初は**官話**、**江南音**にては直聲 tsʼu, 同類の所は so, 助は**官話** tsu, **江南音** dzo と記す。我古書の假名に、所をソ、助をゾに用ゐたるも、蓋し據る所ありしなるべし。我音にて初は拗聲にてショと呼び、其上聲に當る楚は直聲にてソと唱へ、所をショと呼び、其平

聲に當る疎、又其去聲に當る疏をッと唱ふるは、只習慣法といふのみならん。

愁は漢音シュウ、呉音ジュにして、拗聲なること廣韻の反切に遠からずと雖も、官話にては直聲にて tsau と記す。

瘦は反切の歸字の聲の如く、シュウなるべきに、常にッウと記するは、俗讀なるべきか、或は後世の轉音なるべきか。官話に之を tsau と寫すを見れば、兩者其間に聯絡あるが如く思はる。江南音にては直聲 seu なり。尤有宥の韻の au, eu, iu の關係は、我音を以て擬し難し。

此外韻鏡と廣韻とにては、拗聲なるべき二等字にして、官話にて芻を tsʻu, 數を su, 責を tseh, 瑟を seh, 色を seh, と記するが如く、直聲にて寫すことあり。我音にても芻數の音を共にスウと記するは、シウと言ふは別に讀み難き聲にも非ざれば、殊に拗聲を嫌ひて直聲に移したるには非ざるなり。廣東音にては、二等に拗聲を用ゐるを常とす。初を ch'o 助を cho, 所を sho, 愁を chau, 瘦を shau, 芻を ch'o, 數を sh'o, 責を chak, 瑟を chat, 色を shik といふが如し。

側 tʃ(ok)　羊 (y)ông　切 莊 tʃông

莊は漢音サウ、呉音シャウ、官話 shwang, 江南音 shông

右の如く廣韻の反切は、歸字の拗聲なることを示し、呉音、江南音之に從ふ。漢音は直聲なり。官話は合口音にも非ざるに、shwang と記するも異樣なり。

初 tʃʻ(o)　力 (l)yok　切 測 tʃʻok

測は漢音ショク、呉音シキ、官話、江南音 tseh なり。此字の原音拗聲なるべきこと論なし。然るに常に直聲にてックと呼ぶは、俗讀なるか、或は又官話、江南音に類する轉音なるか。

鋤 dʒ(o)　弓 (k)yung　切 崇 dʒung

崇は漢音シュウ、呉音ジュ、官話 tsung, 江南音 dzong なり。此字又直聲にソウと呼ぶことあり、俗讀なるか、或は又官話、江南音に類するものか。

右の諸例、何れも二等韻は三等韻と異なりて、直聲に轉ぜんとする傾向あるを示す。

更に内轉より移りて、外轉の齒音二等韻の性質を探るべし。

側 tsi(ok) 莖 (k)yang 切 爭 tsang

爭は漢音サウ、呉音シャウ、官話、江南音 tsang, 廣東音 chang にして、韻鏡、廣韻、呉音、廣東音は拗聲、漢音、官話、江南音は直聲なり。

所 si(o) 間 (k)yán 切 山 sán

山は漢音サヌ、呉音セヌ、官話 shan, 江南音 san にして、韻鏡、廣韻、官話は拗聲、漢音、江南音は直聲なり。呉音は拗聲シャヌ又シェヌの轉じたるものなるべし。



士 dzi(i) 切 讒 dzám (h)yám

讒は漢音サム、呉音ザム、官話 ch'an, 江南音 dzan にして、韻鏡、廣韻、官話は拗聲、漢音、呉音、江南音は直聲なり。

楚 tsi(o) 江 (k)yáng 切 窓 ts'áng

窓は漢音サウ、呉音ソウ、官話 ch'wang, 江南音 ch'iong にして、漢呉兩音直聲なるは他と協はず。

所 si(o) 交 (k)yáu 切 梢 sáu

梢は漢音サウ、呉音セウ、官話 shau, 江南音 sau にして、呉音は原音拗聲なりしが如し。漢音と江南音とは直聲にして他と協はず。

右の如く外轉の諸韻にても、齒音の二等字には、廣韻の反切に、音字に二等字を用ゐること内轉の例に同じ、但し韻字には、二等字を用ゐ、内轉の如く三等字を用ゐること稀なりとす。

次に脣音、半舌音の下に位する二等字を檢すべし。

伯　py(ak)　　加　(k)yá　　切　巴　pyá

巴は漢音パ、呉音ヘ、官話、江南音paにして、韻鏡、廣韻の拗聲に從ふは、官話と呉音となり。韻字の加を官話にてkia, 江南音にてhaと記す。故に官話にては、巴は元來pia即ちpyaとなるべきを、脣音の拗聲を嫌ひて、直聲に移したるなり。呉音へは拗聲ヒャの轉なるべし。

薄　b(ôk)　　庚　(k)yang　　切　彭　byang

彭は漢音ハウ、呉音ビヤウ、官話pang, 江南音bangにして、韻鏡、廣韻は拗聲なり。呉音之に從ふ。

力　ly(ok)　　閑　(i)yan　　切　爛　lyan

爛は漢音ラヌ、呉音レヌ、官話lien, 江南音lanにして、漢音と江南音とは直聲なれど、他は拗聲なり。呉音のレヌはリャヌ又リェヌの轉なるべし。牛舌音も脣音の如く、拗聲を嫌ひて、直聲に移すことあり。

右三例の如く、反切の韻字は二等字なれど、音字の等位は一定ならず。

二等の脣音は、重脣音のみにして、力の弱き輕脣音を許さず。

次に牙喉音の二等字を考ふべし。

居　ky(o)　　肴　(i)yáu　　切　交　kyáu

右は集韻の反切なり。廣韻は吉肴切にして、音字は直聲なり。交は漢音カウ、呉音ケウ、官話kiau, 江南音kauにして、漢音、江南音の外は拗聲なり。

丘　ky(iu)　　皆　(k)yái　　切　楷　kyái

右は集韻の反切なり。廣韻は口皆切にして、音字は直聲なり。楷は漢呉兩音カイ、官話kiai, 江南音kyáにして、我音の外は拗聲なり。

牛　ngy(iu)　加　(k)yá　切　牙　ngyá

右は集韻の反切なり。廣韻は五加切にして、音字は直聲なり。牙は漢音ガ、呉音ゲ、官話 yá, 江南音 ngá なり。官話は牙喉往來の轉音なり。

乙　iy(it)　甲　(k)yáp　切　鴨　iyáp

鴨は漢呉兩音アフ官話 yah, 江南音 ah なり。官話能く右集韻の反切に協ひて拗聲なり。廣韻は烏甲切にして音字は直聲なり。

許　hy(o)　庚　(k)yang　切　享　hyang

享は漢音カウ、呉音キャウ、官話 hiang, 江南音 hyang にして、漢音の外は拗聲なり。

下　i'y(a)　江　(k)yáng　切　降　i'yáng

降は漢音カウ、呉音ゴウ、官話 hiáng, 江南音 'ông にして、官話獨り韻鏡、廣韻に協ひて拗聲なり。

右諸例に引きたる反切も、音字の等位は一定せず。韻字は常に二等字なり。音字直聲、韻字拗聲の反切は、廣韻牙音の下、其例最も多く、喉音、脣音之に次ぐ。

羣母は一等に現はれず、又二等にも出づること稀なり。これ一等、二等の如き、強き母韻に伴ふ、濁牙音を嫌ひたるに由ることなるべし。二等には、第二十二轉に雄、第三十六轉に越の字ありて、僅かに合口のw音に誘はれて、現はるゝものゝ如し。

喩母は一等に現はるゝこと其例少く、二等には絶無なり。これ喩母は拗聲の如くきこゆる傾向ありて、一等の強き母韻と結合することの難きが故なるべく、又二等にありては、喩母のyと拗聲のyと重なり、yyの音となるを耳障と爲し、拗聲の者は影母の方に譲りたるに由ることとなるべし。その一等に現はるゝ者は、第十六轉の懲と、第三十九轉の澆とのみなり。

普通の場合にても、拗聲を失はんとする二等韻は、合轉の諸韻にては、wの響に隱れて、愈〻其傾向を表はすに至るを見るなり。

下　i'y(a)　　快　(k')wyái　　切話　i'wyái

話は漢音クワイ、呉音ワ又ヱ、官話hwa, 江南音'waなり。

呼　h(o)　　瓜　(k)wyá　　切花　hwyá

花は漢音クワ、呉音ケ又クヱ、官話hwá, 江南音hwóなり。

古　k(o)　　患　(i')wyán　　切慣　kwyán

慣は漢音、呉音クワヌ、官話、江南音kwanなり。

以上諸音に徴して二等韻の性質を研究し來れば、直聲を保ち或は直聲に轉ぜんとする傾向ある者、多きに拘はらず、韻鏡、廣韻は拗聲なること、動かすべからず。內轉の二等韻は、三等韻の變形の如く見ゆる所あれど、外轉の二等韻には、一等韻と相對し、直拗の關係を、明確に表はす者あり。

| 一等 | 直聲 | 二等 | 拗聲 |
|---|---|---|---|
| 咍 | ái | 皆 | yái |
| 寒 | án | 刪 | yán |
| 豪 | áu | 爻 | yáu |
| 覃 | ám | 咸 | yám |

直聲を二等韻に用ゐる漢音にては、此別辨じ難し。漢音は今の南音と緣故を有し、韻鏡、廣韻とは、其系統を異にせるものゝ如し。

四等韻。

四等韻は一等韻に類し、其所屬の字の反切の音字は、直聲なるを本則と爲し、一等字と共通の者を用ゐること多し。これ先づ其歸字の直聲なることを示すと雖も、其韻字に至りては、往々三等字を用ゐて、歸字は憑音と爲り、疑問を起すこと無きに非ず。時に音字韻字共に拗聲なることあるは、或は韻鏡と廣韻と一致せずし

て、其聲を異にしたるに由ることとなるべし。

舌音は舌上音を許さずして、舌頭音其位を占む。

當　t(ông)　經　(k)eng　切　丁　teng

他　t'(a)　兼　(k)ém　切　添　t'ém

杜　d(o)　奚　(i')éi　切　題　déi

奴　(n)o　弔　(t)ei　切　尿　nei

右音字は一等字、韻字は四等字にして、歸字の直聲なるべきこと論なし。

齒音は皆齒頭音にして、正齒音を許さず。左に直拗兩聲相紛れ易き數例を擧ぐ。

子　ts(i)　邪　(z)é　切　嗟　tsé

嗟は漢音シャ、吳音サ、官話tsie, 江南音tso, 廣東音tseにして、漢音は拗聲他は直聲なり。

七　ts'(it)　羊　(y)ông　切　鏘　(ts'ông)

鏘は漢音シャウ、吳音サウ、官話、江南音ts'iang, 廣東音ts'eungにして、漢音は拗聲、官話、江南音は直聲なるが如し。他は直聲なり。

昨　dz(ôk)　焦　(ts)éu　切　樵　dzéu

樵は漢音セウ、吳音ゼウ、官話tsiau, 江南音dziau, 廣東音tsiuにして、漢吳兩音は直拗判じ難きも、官話、江南音、廣東音は直聲なるが如し。

息　s(ok)　弓　(k)yung　切　嵩　sung

右は音字直、韻字拗の憑音なり。嵩は漢音シュウ、吳音シュ、官話sung, 江南音songにして、漢吳兩音は拗聲、他は直聲なり。此字常にスウと呼ぶは、シュウの轉じたる和音に非ずして、據處あるなるべし。此音官話と共に韻鏡廣韻に協ふ。

嵩の入聲は肅にして、其反切は左の如し。

息　s(ok)　　逐　(d)uk　　切　肅　suk

是亦音字直、韻字拗にして、歸字は直聲なれど、拗聲に傾く所あるが如し。肅は漢吳兩音シュク、官話 suh, 江南音 soh なり。

祥　(z)ông　　容　(y)ong　　切　松　zong

松は漢音ショウ、吳音ジュ、官話 sung, 江南音 zong にして、漢音、吳音は拗聲、他は直聲なり。松江をズンコウと呼び習はせたるが如きも、松にズング又ゾングの音ありたるを示す。

松の入聲は續なり。續は漢音ショク、吳音ゾク、官話 suh, 江南音 zoh なり。同類の縱は漢音ショウ、吳音シュ、官話 tsung, 江南音 tsong にして、其入聲足は漢音ショク、吳音ソク、官話 tsuh, 江南音 tsoh なり。入聲の吳音は、官話、江南音と共に、能くその直音なるを證す。

脣音も輕脣音は此等に下ることと能はず。反切の音字は、通例一等と共通なる重脣音なり。韻字は時には三等字を用ゐることあれど、歸字は直聲なるを定則とす。

必　p(it)　　切　卑　pi

彌　m(i)　　切　民　min

右二例は一は四等、一は三等の韻字を用ゐたる者を出だす。

牙音喉音の四等字は、其反切の韻字は、通例四等字なれど、音字は一等、四等の直聲字あり、或は三等の拗聲字ありて一様ならず。音字直聲なるときは、歸字の隨つて直聲なるべきこと言ふまでもなし。

古　k(o)　　靈　(l)eng　　切　經　keng

五　ng(o)　　聊　(l)éu　　切　堯　ngéu

胡　i'(o)　　田　(d)én　　切　賢　i'én

音字拗聲なるときは、四等韻の響の弱きに由り、之に伴ひて拗聲

の力の脱落たるものと見て説明すべし。

居　ky(o)　　隨　(z)wi　　切　規　kwi
去　k'y(o)　　盈　(y)eng　　切　輕　k'eng
喜　hy(i)　　夷　(y)i　　切　咦　hi

音字の直聲なると拗聲なるとに由り、其歸字の聲に、聊か異なる所あるべしと信ずれど、羅馬字にては表はし難し。

音字四等、韻字三等、歸字四等の場合は、前例と同様の結果と見做すべし。

息　s(ok)　　鄰　(l)yin　　切　辛　sin
以　y(i)　　成　(z)yeng　　切　盈　yeng

音字三等、韻字三等なれば、音和正法の反切にて、歸字も無論三等なるべければ、之を四等に位せしむるは、廣韻と韻鏡と一致せざるものと見做すべし。

居　ky(o)　　正　(ts)eng　　切　勁　kyeng
於　iy(o)　　眞　(ts)in　　切　因　iyin

勁は玉篇にては吉聖切、因は集韻にては伊眞切にして、韻字は拗聲なれども、音字は直聲なり。韻鏡にては、兩字四等字なれば、勁は keng, 因は in なるべし。

四等韻の性質につき、左の諸項に注意を要す。

一、四等韻の響は、其力の弱きに由り、江南音にては、茲子を ts、此次を ts'、疵自を dz、思私を s、似寺を z と記するが如く、母韻を除き去りて表はすを常とす。官話も亦同法を用ゐ、茲子自を tsz, 此次疵を ts'z, 思私似寺を sz と、無韻にて其聲を寫す。此類の中に他等の字も混ずること無きには非ざれども、其は寧ろ例外と見て可なるべし。

二、韻鏡の合轉に屬する字は、我假名にては和行の假名を以て表

はすことを定則と爲す。然るに第十六轉の鋭叡はェイ、第二十二轉の沿鉛椽緣捐鳶兗はェン、悅閲はェッ、第三十四轉の營穎はェィ、役疫はェキと記するが如く、合轉に屬する字を古來阿行の假名を以て寫せるは、久しく學者の惑を起さしめ來れる所なり。其理由は他に非ず。四等韻には拗聲の伴ひ能はざるが如く、合口の發聲wも、此韻と結びては勢弱く、上のyに壓されて、下のeの聲のみ耳立ちて聽こえ、遂に開口の也行假名にて寫したるものなるべし。之に反し、三等韻にては、拗聲能く合口の發聲と結びて、確かなる合口音を生じたるなり。故に三等字の和行假名なるべきこと疑無し。本居氏の**假字用格**を祖とせる、從來の假名遣に、三等字の榮永の類までを、ェィの方に移したるに由り、今より十數年前、東京永代橋落成の際、之にェィタィの假名を附したりとて、いはゆる字音假名遣に協はざるこ



とゝして、學者連の非難を受け、狼狽の結果、忽ち之を塗直し、更にェィタィと書改めて、心ある人の物笑の種となりたることを記憶す。榮永は廣**東音**にて wing と呼ぶを見れば、合口音なること爭ふべからず。

右は喩母所屬の字に就いて言へるなり。即ち下のe(ェ)の母韻と結びて、三等のywyは粘り氣强くしてw音を保ち、四等のywは双方軟かにして、ュ音の如く變はりてeの母韻に接し、wの響微かとなりて、ye(ェ)の音のみ確かに聽こえたるものなるべし。他の喉音は場合同じからず。第十四轉匣母の惠の**漢音**は、原音クェィなり。此字の**吳音**は、其假名和行のェなり。影母所屬の字も、其響輕しといへども、亦ェの假名を以て記すべし。白井寛蔭氏の**音韻假字用例**に、影母四等の合口音にも、也行のェを用ゐたるは、太田氏の四等耶行定母の說に誤られたるものなる

べし。即ち第十四轉の烓をエイ、第二十二轉の娟悁嬛をエン、姺をエッ、第三十四轉の縈をエイ、第三十六轉の譽鎣をエィと記せるが如し。是皆和行のェの假名なるを正しとす。**假字用格**に、淵をエンの中に入れたるは可なれど、娟をエンの中に入れたるは當らず。第三十六轉影母四等に屬する熒を、**廣東音**にてwingと呼ぶ。匣母にも此字あれど、その合口音なること同じ。亦以て四等喩母以外の音は、wを失はざることを證するに足る。

以上ェェ假名遣の別は、事の序に記せるのみ。

三、開轉に屬する諸韻にては、喩母所屬の字獨立して四等に現はれ、合轉に屬する諸韻にては、或は三等或は三四兩等に現はる る例多し。開轉にては喩母のy、三等韻に伴ひて、yyの如き拗聲に聞こゆるを避け、四等に下りて直聲と爲るなり。されど又合口の發聲wと伴ふときは、ywyの形と爲り、合轉にて三等韻と伴ふも、別に聞き苦しからずして、其位置を保つことを得るなり。左に二例を擧げて之を示す。

| | | | |
|---|---|---|---|
| 內轉第六開。 | 三等 | 四等 | |
| | ○ | 肆 | yi |
| 內轉第七合。 | 三等 | 四等 | |
| | 位 ywyi | 遺 ywi | |

右の場合には、我假名にては、三等をヰ、四等をユヰと書くことあり。双方を假名にてヰと記するときの如く、**官話**にては共にwei なり。ywyi の頭のyを省くときは其形之に近し。

| | | | |
|---|---|---|---|
| 外轉第二十一開。 | 三等 | 四等 | |
| | ○ | 延 | yen |
| 外轉第二十二合。 | 三等 | 四等 | |
| | 袁 ywyen | 沿 ywen | |

右の場合には、我假名にては、三等をェヱ、四等をェヱと記す。**官話**にては共に yuen なり。

因に記す、第八轉開喩母三等四等の記法、諸本一致せず。上聲三等に、或は以の字を置くあり、或は矣の字を置くあり。**諸鈔大成**は、三等を空位と爲し、四等に以の字を置く。**發輝**は矣音以と爲して、矣を三等に置かずして之を削り、以を四等に置くこと、**大成**に同じ。今之に從ふ。第十七轉開喩母入聲三等に**磨光**外數本、颸の字あれど、舊本に之を載せざる者あり。今之に從ふ。明かに例外となる者は開轉喩母三等字にして、第二十三轉平聲瀉、第二十五轉平聲鴞、第三十八轉去聲類、入聲煜、第三十九轉平聲炎、入聲曄、第四十轉入聲殪の七字のみ。第三十七轉にも喩母三等に字あれど、此轉の開合疑問に屬する所あり。

四、前述の喩母と共に、他音を離れて、齒音のみ四等韻に伴ひて、現はるゝことあり。齒音には特別なる發聲の力ありて、この弱き韻と伴ひ得ることゝ見ゆ。注意第一項に於いて說きたるが如く、現今の支那音には、母韻の脫落ちて、尙其形を留むるは、齒音に此特性あるに由ることとなるべし。此齒音の、殊に內轉の二等韻に現はるゝことあるも、既に述べたる所なり。

五、匣母は內轉の四等韻に伴ふこと能はず。これ出氣性の音の、力の弱き韻と結ぶこと能はざるに由ることとなるべし。匣母は拗聲なる三等韻を嫌へど、外轉の響の稍强き四等韻に伴ひては、現はるゝことを得るなり。

因に記す、內轉第十七平聲四等匣母の下礦の字あり。此字廣韻下珍切なり。下は二等字、珍は三等字なれば、礦は寧ろ二等に位すべく、四等に屬すべき字に非ず。

六、半舌音は內轉の四等韻に伴ふこと至つて稀なり。其韻の響弱

きが故、l の如き軟かなる音は、勢消えて結合すること能はざるに由ることとなるべし。其響の稍強き、外轉の四等韻に接するときは、現はれ出づることあり。蓮の len, 聊の leu, 靈の leng, 禮の lei, 濂の lem の如し。只鏐の liu のみは、i の母韻に伴ふ。

七、邪母は四等專屬の音なり。これ弱き韻に適したる音と見做す外別に說明なし。

總　括。

以上述べ來りし所に由り、一等は直聲、二等、三等は拗聲、四等は直聲なるを知るべし。二等は韻の力强く、動もすれば拗聲を破りて直聲に轉ぜしむる傾向ありて、拗聲の明かなる、舌上音、正齒音所屬の字にも、韻鏡以外の音にては、直聲なる者少からず。三等は全く拗聲にて、疑を挾むべき餘地なし。四等は韻の力弱く、二等と反對の理由にて、拗聲之に伴ふこと能はずして消落ち、直聲の形を保つに至れり。故に四等字には、韻鏡以外に拗聲あるも、敢て怪しむに足らず。

脣、舌、齒の三音に、輕重の別あるは如何。これ他なし。そのいはゆる重音と名づくる者、二等、三等の拗聲の韻に接し、之に惹かれて其音を轉じたるまてにて、輕重の名は深く拘泥すべからず。牙音、喉音に於いても、二等、三等に在りては、拗聲に轉ずれど、其韻と相接するとき、他に比すれば、稍圓滑を缺き、落着かざる所ありたるが如し。廣韻の反切に、正法ならざる者の現はるゝこと多きは、蓋し是に由ることとなるべし。

左に一見明瞭ならしむるかため、字母と等韻との關係を再記して之を示す。

一、輕脣音非敷奉微は、三等專屬の拗聲字母にして、二等に上ることなし。

一、羣母は一等に現はれず、二等にも出づる例至つて稀なり。
一、邪母は四等專屬にして、他等に出づることなし。
一、牀母は三等にては缺位の場合多し。
一、禪母は三等專屬にして、二等に出づることなし。
一、匣母は三等に現はるゝことなく、四等には比較的強き母韻に伴ふときは其位を占む。
一、喻母は一等に現はるゝこと其例少く、二等には絶えてこれなく、三等には開轉を避けて、合轉の諸韻に伴ひ、四等には開合兩轉に現はれ、特に開轉にては、孤立の姿を取る場合多し。
一、來母は四等にては比較的強き母韻に伴ふとき、其形を現はす。
一、日母は三等專屬なり。

## 第五章　二百六韻考

### 內轉第一合。

| | | |
|---|---|---|
| 東 | ʿong | オウ |
| | ʿyung | ユウ |
| | ʿyung | ユウ |
| | ʿung | ウ |
| 董 | ʿong | オウ |
| | | |
| | | |
| | | |
| 送 | ong' | オウ |
| | yung' | ユウ |
| | yung' | ユウ |
| | | |
| 屋 | ok, | オク |
| | yuk, | ユク |
| | yuk, | ユク |
| | uk, | ウク |

一等のongはungに近き聲なりしと知るべし。通をtʿung(ツウ)、空をkʿung(クウ)と呼ぶも此故なるべし。呉音は總べて通をッ、空をクの如く短かく呼びて、尾音のングを落とす。此轉の合音は至つて輕微にして、wを附する要を見ず。

## 內轉第二開。

| | | |
|---|---|---|
| 冬 | ˇong | オウ |
| | | |
| 鍾 | ˇyong | ヨウ |
| 鐘 | ˇong | オウ |
| | | |
| | | |
| 腫 | ˇyong | ヨウ |
| 腫 | ˇong | オウ |
| 宋 | ong› | オウ |
| | | |
| 用 | yong› | ヨウ |
| 用 | ong› | オウ |
| 沃 | ok› | オク |
| | | |
| 燭 | yok› | ヨク |
| 燭 | ok› | オク |

隋唐以前の古韻にては、第一、第二、兩轉所屬の者は、同一なりしを觀る、而して其時代には、共に ung の聲なりしが如し。古音にて冬をッ、農をヌと呼びしことあり、即ち此聲に近し。兩轉の韻を官話にては ung、江南音にては ong と記す。官話は吳音、江南音は漢音の記法に似たるも、奇なりと謂ふべし。



## 外轉第三開。

| | | |
|---|---|---|
| | | |
| 江 | ˇyáng | ヤウ |
| | | |
| | | |
| | | |
| 講 | ˇyáng | ヤウ |
| | | |
| | | |
| | | |
| 絳 | yáng› | ヤウ |
| | | |
| | | |
| | | |
| 覺 | yák› | ヤク |
| | | |
| | | |

漢音アウ、吳音オウ、共に此聲に同じからず。官話 iáng は、即ち yáng に同じ。支那にて江陽の兩韻の通じたることありしは、此聲ありしに由るなり。漢音アウは厦門音 áng に同じく、吳音オウは江南音 ông に近し。六朝の頃までは、詩歌の押韻法に徵するに、東、冬、江の三韻、同一なりしが如し。

## 內轉第四開。

| | | |
|---|---|---|
| 支 | | |
| | ʸyi | イ |
| | ʸyi | イ |
| | ʿi | イ |
| 紙 | | |
| | ʿyi | イ |
| | ʿyi | イ |
| | ʿi | イ |
| 寘 | | |
| | yiʾ | イ |
| | yiʾ | イ |
| | iʾ | イ |

支、紙、寘の韻所屬の字は、我古音にて施をセ、宜をゲと呼べるが如く、魏晉の頃にはe(エ)の聲なりしが如し。易、積は去聲寘の韻より、入聲昔の韻に移れば、エキ、セキの音となり、又入聲エキ、ヘキの音ある益、辟は、諧聲字縊、臂の音符となるときは、之をして去聲寘の韻に位せしむるが如し。是に因りて考察するに、此轉の韻の聲の





i(イ)は、e(エ)に近き所ありしなるべし。その通ふ所の入聲韻は、尾音k(キ)なるを見れば、此轉は喉韻にして、其聲の長かりしものと推斷す。

## 內轉第五合開。

| | | |
|---|---|---|
| 支 | | |
| | ʿwyi | キ |
| | ʿwyi | キ |
| | ʿwi | キ |
| 紙 | | |
| | ʿwyi | キ |
| | ʿwyi | キ |
| | ʿwi | キ |
| 寘 | | |
| | wyiʾ | キ |
| | wyiʾ | キ |
| | wiʾ | キ |

合の標記wは音に屬すれど、開合對次を示すがために、韻の前に之を附す。其拗聲はwyと記すれど、ywと爲すも別に妨なし。合轉

の韻の性質は、之に對する開轉の韻の性質と異なる所なし。以下總べて之に準ずべし。

内轉第六開。

| | | |
|---|---|---|
| 脂 | ʸi | イ |
| | ʸi | イ |
| | ʿi | イ |
| 旨 | | |
| | | |
| | ʿyi | イ |
| | ʿi | イ |
| 至 | | |
| | | |
| | yiʾ | イ |
| | iʾ | イ |

諸聲字の關係、至の室、肆の聿、懿の壹、祕の必に於けるが如く、入聲は質の韻に入る者多し。比、質の二字の如きも、去聲にては至の韻に入り、入聲にては質の韻に移る。此轉の韻の聲はi(イ)にして、其入聲の尾音は、t(ッ)と爲るを見れば、その舌韻にして、聲の短かゝりしを察し得べし、

内轉第七合。

| | | |
|---|---|---|
| 脂 | | |
| | ʿwyi | キ |
| | ʿwyi | キ |
| | ʿwi | キ |
| 旨 | | |
| | | |
| | ʿwyi | キ |
| | ʿwi | キ |
| 至 | | |
| | | |
| | wyiʾ | キ |
| | wyiʾ | キ |
| | wiʾ | キ |

出の ʿwi(スキ)は ʿwit 即ち ʿut(シュッ)、帥の swiʾ(スキ)は swit 即ち sut(シュッ)に通ふが如き例あるは、第六轉の格に同じ。

## 內轉第八開。

| | | |
|---|---|---|
| 之 | | |
| | ʸi | イ |
| | ʸi | イ |
| | ʿi | イ |
| 止 | | |
| | ʿyi | イ |
| | ʿyi | イ |
| | ʿi | イ |
| 志 | | |
| | yiʾ | イ |
| | yiʾ | イ |
| | iʾ | イ |

食、直の、入聲、職の韻に移り、又諧聲字にては、寺の特、廁の則、意の億、異の翼、試の式、熾の戢、疑の嶷に於けるが如き關係にて、入聲は德、職の韻に通ふを見れば、尾音は喉韻のk(ク)に屬して、韻の聲長かりしを察し得べし。啻に入聲のみならず、之の韻は古來平、上、去の三聲を通じて、登、蒸の韻の三聲に往來せしことあり。徵、疑の之、蒸



兩韻に屬し、齒、耳の止、極兩韻に屬せるは其例なり。蒸の韻にては、疑は凝と同聲なりしと知るべし。さて之の韻をi(イ)の聲と爲すときは、食をジ、ジキ、直をヂ、ヂキと、**吳音**に讀みて協へるが如し。さすれば、徵、疑は**官話**の如く、ʿching(チング)、ʿying(イング)と呼ぶには符合すれど、**吳音**にて、之をチョウ、ゴウと呼ぶは當らざることゝなるべし。我古音にて、意をオ、期をゴ、己をコと呼べるが如く、此轉の韻にはオの聲ありたるを見る。されば食、直、徵、疑を、**漢音**にてショク、チョク、チョウ、ギョウと言ふと相通ふに似たり。意ふに此轉の韻は、純粹のi(イ)に非ずして、o(オ)、u(ウ)に近き所ありたるものゝ如し。漢以前の古韻にては、之の韻は尤の韻に通じ、之に屬せし字の一部は、後尤の韻に移り入れり。これ其當時iの聲ならざりしを證するに足るべし。今の**江南音**にても、子をツ、思をス、寺をズの如く、響かす傾向あり。

## 內轉第九開。

| | | |
|---|---|---|
| 微 | ʿyi | イ |
| 尾 | ʿyi | イ |
| 未 | yiʔ | イ |
| 廢 | yéʔ | エ |

我古音にて、衣をエ、氣をケと唱へたるが如く、此轉の韻は、e(エ)に近き聲ありたるものなるべし。相通へる所の字の入聲は、迄の韻に入る。氣、乞の兩字、古へ同音に用ゐられたるを見て、之を察すべし。入聲の尾音はt(ツ)なるが故、此轉は舌韻にして、其聲は短かゝりしものと推斷することを得べし。微の韻は、欣の韻に通へるより、或はo(オ)の聲にも近き所ありたるならんかとも思はる。祈、沂の音符は斤なり。この斤にコヌの音あり、又入聲の乞にコッの音あり、以て其證と爲すべし。前に既に內轉の解に於いて示したるが如く、此轉は第十轉と共に其韻の響軟かなりしを察すべし。廢の韻を此轉の下に寄せたるは、e(エ)に近き聲なりしに由るか。



## 內轉第十合。

| | | |
|---|---|---|
| 微 | ʿwyi | ヰ |
| 尾 | ʿwyi | ヰ |
| 未 | wyiʔ | ヰ |
| 廢 | wyó | エ |

沸、芾は去聲未の韻に屬してfwyi又fyi(フヒ)、又入聲物の韻に屬して、fwyit又fut(フッ)と爲る。兩者の關係第九轉に同じ。古へ微の韻は文の韻に通へり。軍を音符として、揮、煇等の字の作られたることと明かなれば、是に由りて本韻の聲を推察すべし。

此轉の廢の韻はwe(ヱ)の聲なりしが如し。穢の吳音はヱなり。

內轉第十一開。

| | | |
|---|---|---|
| 魚 | | |
| | ʿyo | ヨ |
| | ʿyo | ヨ |
| | ʿo | オ |
| 語 | | |
| | ʿyo | ヨ |
| | ʿyo | ヨ |
| | ʿo | オ |
| 御 | | |
| | yo) | ヨ |
| | yo) | ヨ |
| | o) | オ |



去聲御の韻に屬する著の字、入聲藥の韻に移り、又諧聲字としては、音符虡の、御の韻の遽の字に入り、又藥の韻の噱の字に入るを見れば、此轉は喉韻にして、其聲の長かりしを知るべし。**官話**にてはü、**江南音**にてはü又öを以て之を表はす。その通へる所の入聲韻の尾音はk(ク)なり。

內轉第十二合。

| | | |
|---|---|---|
| 模 | ʿwo | ヲ |
| 虞 | ʿwyu | ウユ |
| 虞 | ʿwyu | ウユ |
| 虞 | ʿwu | ウ |
| 姥 | ʿwo | ヲ |
| 麌 | ʿwyu | ウユ |
| 麌 | ʿwyu | ウユ |
| 麌 | ʿwu | ウ |
| 暮 | wo) | ヲ |
| 遇 | wyu) | ウユ |
| 遇 | wyu) | ウユ |
| 遇 | wu) | ウ |

第十二轉の韻は、入聲鐸、藥の韻に通へる者多し。諸聲字と音符との關係、固涸、尃博、模莫、祚乍、虎虐等の如し、因りて此轉の韻の聲は、第十一轉の如く喉韻なるを知るべし。此轉は極めて輕微なる合轉にして、開合對次の形式上、第十一の開轉に對し、wを附して表はせど、之を省くも不可なる所なかるべし。**官話**にては、uを以て之を寫す。uは支那音にては、輕き合口音となる。特に假名遣の紛れを避くるがためには、其原音にwを記して合音を示す要あるべし。最も影母に於いて然かすべき場合多し。此轉の韻と入聲鐸、藥の韻との關係を見るに、古韻にては此類にo(オ)の聲ありて、開轉に屬せし字多かりしものゝ如し。

是より第十三、第十四、第十五、第十六の諸轉の配置について說明すべし。**磨光**は第十三、第十四の兩轉を左の如く分てり。

外轉第十三開。　咍皆咍齊　海駭海薺　代怪〇霽

外轉第十四合。　灰皆齊齊　賄〇〇〇　隊怪祭霽

又第十五、第十六の兩轉を左の如く分てり。

外轉第十五開。　〇佳〇〇　〇蟹〇〇　泰卦祭祭

外轉第十六合。　〇佳〇〇　〇蟹〇〇　泰卦〇祭

平聲咍、上聲海の三等に再出すること如何、之に對する去聲にては三等の空位なること如何、咍と齊と開合相對すること如何、祭は第十三轉の三等に存ぜずして、第十四轉の三等にのみ存する如何、祭は却て第十五轉の三等に現はれ、之に對する第十六轉の三等にはこれなきは如何、其分類皆理に合はざるが如し。**磨光**以前の舊本には、多く左の如く排列せり。

外轉第十三開。　咍皆〇齊　海駭〇薺　代怪祭霽

外轉第十四合。　灰皆〇齊　賄駭〇〇　隊怪祭霽

外轉第十五開。　〇佳〇〇　〇蟹〇〇　泰卦〇祭

外轉第十六合。　○佳○○　○蟹○○　泰卦○祭

この舊本の順序、却て當を得たりと謂ふべし。

第十三轉、平聲三等、齒音次清、犇は、**廣韻**にては咍に入れど、**韻鏡**にては齊に屬すべく、上聲三等、齒音次清、茝、半齒音疠は、**廣韻**にては海に入れど、**韻鏡**にては齊に屬すべき格なり。

**磨光**は舊本を改め、第十三轉の祭を移して、之を第十五轉の中に置けり。**發輝**は更に又第十四轉の祭を、第十六轉に移せり。**磨光**許すべくば、**發輝**更に進んで從ふべし。然れども是は私見を以て濫りに改むべきに非ざるが故、舊本に從ふを宜しとす。祭は其實は廢、夬、泰と共に、獨立の去聲韻なれば、何れの位置に在りても、差支なきが如く思はるれど、其配置には亦相當の理由あり。其は後に説明すべし。

外轉第十三開。





| | | |
|---|---|---|
| 咍皆齊 | ɐ́i | アイ |
| | ɐ́yi | ヤイ |
| | ɐ́yei | エイ |
| | ɐ́ei | エイ |
| 海駭薺 | ɐ̀i | アイ |
| | ɐ̀yi | ヤイ |
| | ɐ̀yei | エイ |
| | ɐ̀ei | エイ |
| 代怪祭霽 | ɐ́iʔ | アイ |
| | ɐ́yiʔ | ヤイ |
| | ɐ́yeiʔ | エイ |
| | ɐ́eiʔ | エイ |
| 夬 | | |
| | ɐ́yiʔ | ヤイ |
| | | |
| | | |

**官話**、**江南音**に徵するに、此轉の一等、二等は、直拗の別明かなり。三等平、上は拗聲齊、薺の韻の格なり。然るに平聲に、咍の韻に屬する犇の字あり、上聲に海の韻に屬する茝疠の字あるは如何。元來咍、海は直聲の韻なるに、右の三字は拗聲なるが故、置くに處なくして、齊、薺の韻の格なる、三等に位せしめたるものなるべきが、是は後人の挿入したるものならんかと疑はる。齊、薺、霽は直聲の韻に

して、四等に位するを本格と爲す。第十四轉の平聲三等に位する移韻の二字は、寧ろ例外と見做すべし。

外轉第十四合。

| | | |
|---|---|---|
| 灰 | ˏwái | ワイ |
| 皆 | ˏwyái | ウヰイ |
| 齊 | ˏwyéi | エイ |
| | ˏwéi | エイ |
| 賄 | ˊwái | ワイ |
| 駭 | ˊwyái | ウヰイ |
| | | |
| 隊 | wái˺ | ワイ |
| 怪 | wyái˺ | ウヰイ |
| 祭 | wyéi˺ | エイ |
| 霽 | wéi˺ | エイ |
| | | |
| 夬 | wyái˺ | ウヰイ |
| | | |
| | | |

二等韻は拗聲の格なれど、我假名にてィを省き、一等韻の如く記すると同様に、官話にてもyを省くを常とす、即ち乖をクワイと記すると同じく、kwái と爲すが如し。原音の形式は kwyái 又 kywái



に當る。

夬は獨立韻にして、怪とは其性質同じからず。假りに其位を第十三、第十四兩轉の入聲の場所に置き、去聲寄此と記すること、第九、第十兩轉の下に、廢を置くが如し。これ未と廢との如く、怪と夬とに、其聲の稍類似せる所ありしに由るなり。

外轉第十五開。

| | | |
|---|---|---|
| | | |
| 佳 | ˏyái | ヤイ |
| | | |
| | | |
| | | |
| 蟹 | ˊyái | ヤイ |
| | | |
| | | |
| | | |
| 泰 | ái˺ | アイ |
| 卦 | yái˺ | ヤイ |
| | | |
| 祭 | éi˺ | エイ |

佳の韻には、古へ支、歌の韻に通ひたる者多し。圭卦厓蛙、卑牌稗、叉釵扠、麗灑曬、奚膝謎、咼媧謁、責債、益隘等の如し。其一部は今齊の韻に入る。又脂微の韻とも通ひたる者あり。此柴眦、委矮、威崴等の如し。右の關係に就いて考ふれば、第十五、第十六の兩轉は、第十三、第十四の兩轉とは、其系統を異にするを知るべし。此別今假名又羅馬字を以て表はし難し。佳の韻の字は、屢々下のィの音を落とすことあり。**漢音**にて佳をカ、釵をサと言ふが如し。**江南音**にても、佳を(kya, 釵を(ch'a と記する例あり。**官話**にては、佳は kiái 釵は ch'ái なり。

此轉の去聲に泰の韻ありて、一等に位す。平上共に之に對する一等は空位なり。泰と卦とは直拗相對すれど、韻の系統は同じからざるに似たり。夬は能く泰と直拗相協ふ。害犗、藹喝、貝敗、最噦は其例にして、上は泰、下は夬に屬す。祭の韻も亦平上共に之に對する者なし。泰、夬、祭は其入聲月、曷、末、黠、鎋、薛に通へり。右三種の去聲韻は、怪とも卦とも同類ならざるが故、本來は他と分れて獨立すべき格なりとす。廢も古韻にては、此部に入る。泰、夬の韻所屬の字には、時に下のィを落とすことあり。太をタ、兌をダ、話をワと爲すが如し。

外轉第十六合。

| | | |
|---|---|---|
| 佳 | | |
| | (wyái | ウヤイ |
| | | |
| | | |
| 蟹 | | |
| | (wyái | ウヤイ |
| | | |
| | | |
| 泰 | wái) | ワイ |
| 卦 | wyái) | ウヤイ |
| | | |
| 祭 | wéi) | エイ |

主要なる説明は第十五轉に同じ。喩母の下四等韻祭に屬する銳、叙は合轉なれば、ェィの假名なるべきに、開口音のェィにて表はすこと、前に説けるが如く、韻の響の弱きに連れ、w音落ちて、y音の殘りたるに由るなり。

## 內轉第十七轉開。

| | | |
|---|---|---|
| 痕 | ɛon | オン |
| 臻 | ɛyin | インイン |
| 眞 | ɛyin | インイン |
| 眞 | ɛin | インイン |
| 很 | ʿon | オンオン |
| | | |
| 軫 | ʿyin | インイン |
| 軫 | ʿin | インイン |
| 恨 | on' | オンオン |
| | | |
| 震 | yin' | インイン |
| 震 | in' | インイン |
| 沒 | ot, | オッオッ |
| 櫛 | yit, | イッイッ |
| 質 | yit, | イッイッ |
| 質 | it, | イッイッ |

此轉につき、先づ疑問の起るべきは、一等o(オ)の、他等のi(イ)と相



對することとなり。**官話**にては恩をɛn, 痕をʿɛn, 根をʿken と言ふ。されば一等韻にan(アン)、en(ェヌ)、on(オヌ)の三聲あり。此轉內轉なるが故、anの聲ならざりしこと明かなり。**廣東音**にては他等にても亦anの聲あり。莘をshan, 人をyan, 賓をpanと言ふが如し。又**吳音**には牙喉兩音の三等韻に、オの聲を用ゐる例あり。巾にュヌ、乙にォッの假名を當つるが如し。案ずるに一等韻のonはenに近く、二等韻は**官話**にて入聲の瑟、櫛をseh, tsieh と記して、之に對する三等韻失、質のshih, chihと分かつ例あるを見れば、是も亦yenに類似の聲なりしを察し得べし。三等韻のinは、我**吳音**より推して考ふるに、onに近き聲ありたるものゝ如し。四等韻は直聲にして、inの聲なりしかと思はるゝ所あり。**吳音**にて三等韻の乙はォッなれど、之に對する四等韻の一はィッなるを以て、聊か其別を窺ふに足るべし。支那音

は我假名又羅馬字の音と、其性質を異にするが故、適當に之を寫し難し。

内轉第十八合。

| | | |
|---|---|---|
| 寃 | ˏwon | ヲヌ |
| | | |
| 諄 | ˏwyin | キヌ |
| 諄 | ˏwin | キヌ |
| 混 | ˊwon | ヲヌ |
| | | |
| 準 | ˊwyin | キヌ |
| 準 | ˊwin | キヌ |
| 慁 | won˃ | ヲヌ |
| | | |
| 稕 | wyin˃ | キヌ |
| 稕 | win˃ | キヌ |
| 沒 | wot˲ | ヲツ |
| 術 | wyit˲ | キツ |
| 術 | wyit˲ | キツ |
| 術 | wit˲ | キツ |

一等韻の記法、**官話**にては諸種あり。溫を（wan, 寃を（ˏwan, 坤を（kwan と記し、奔を（pan と記し、敦を（tun, 尊を（tsun, 論を（lun, 門を（mun と記す。**江南音**にては、溫寃を（wen, 坤を（k'wen, 奔を（pen, 敦を（ten, 尊を（tsen, 論を（len, 門を（men と記す。即ち奔以下は開轉の記法なり。此韻を won と記して、wen に近き聲なりしと悟り置くべし。wyin は yun と爲ること常なり。春の原音 tswin の、tsun と爲るが如しこれ我音のシュヌに當る。



内轉第十九開。

| | | |
|---|---|---|
| | | |
| | | |
| 欣 | ˏyin | イヌ |
| | | |
| | | |
| | | |
| 隱 | ˊyin | イヌ |
| | | |
| | | |
| | | |
| 燉 | yin˃ | イヌ |
| | | |
| | | |
| | | |
| 迄 | yit˲ | イツ |
| | | |

## 內轉第二十合。

| | | |
|---|---|---|
| 文 | | |
| | | |
| | ˇwyin | ㄧㄨㄣ |
| | | |
| 吻 | | |
| | | |
| | ˇwyin | ㄧㄨㄣ |
| | | |
| 問 | | |
| | | |
| | wyin› | ㄧㄨㄣ |
| | | |
| 物 | | |
| | | |
| | wyin› | ㄧㄨㄣ |
| | | |

第十七、第十九兩轉の三等韻は、其區別稍隱微なり。第十八、第二十兩轉の三等韻も亦同樣なり。第十七轉は第六轉に、第十九轉は第九轉に通ひたるを見れば、第十七轉と第十九轉との差は、第六轉と第九轉との差に類し、又合轉の方、第十八轉は第七轉に、第二十轉は第十轉に通ひたるを見れば、第十八轉と第二十轉との差は、



第七轉と第十轉との差に類するを知るべし。第十九、第二十の兩轉は、第九、第十の兩轉と、其性質相同じく、其韻の響の軟かなりしも亦相同じ。

## 外轉第二十一開。

| | | |
|---|---|---|
| 山元仙 | | |
| | ˇyán | ㄧㄚㄣ |
| | ˇyén | ㄧㄝㄣ |
| | ˇén | ㄝㄣ |
| 產阮獮 | | |
| | ˇyán | ㄧㄚㄣ |
| | ˇyén | ㄧㄝㄣ |
| | ˇén | ㄝㄣ |
| 襇願線 | | |
| | yán› | ㄧㄚㄣ |
| | yén› | ㄧㄝㄣ |
| | én› | ㄝㄣ |
| 鎋月薛 | | |
| | yát› | ㄧㄚㄅ |
| | yét› | ㄧㄝㄅ |
| | ét› | ㄝㄅ |

**官話**にて二等韻の間を(kien, 山を(shan と記す。**吳音**のケヌ、セヌ之に似て、yan の聲に近し。**江南音**にては間を(kan, 山を(san, と記する

こと、漢音のカヌ、サヌに類す。三等韻の軒を官話(hien, 江南音(hyien, 言を官話(yen, 江南音(yien と記するは、yen の聲の格なり。然るに呉音に軒をコヌ、言をゴヌと呼ぶを見れば、on の聲もありしが如し。四等韻の en なりしは、動かざる所なるべし。

外轉第二十二合。

| | | |
|---|---|---|
| 山元仙 | | |
| | (wyán | ウヰヌ |
| | (wyén | ヱヌ |
| | (wén | ヱヌ |
| 阮 | | |
| | | |
| 彌 | (wyén | ヱヌ |
| | (wén | ヱヌ |
| 潤願線 | | |
| | wyán) | ウヰヌ |
| | wyén | ヱヌ |
| | wén) | ヱヌ |
| 鎧月薛 | | |
| | wyát) | ウヰヌ |
| | wyét) | ヱヌ |
| | wét) | ヱヌ |

合轉の二等韻は、現時の支那音、常に y を省くこと多く、漢音、呉音の假名も、亦拗聲を留めずして、其形一等韻と異なる所なけれど、斯くては開轉と相對次せず。古へは然らざりしこと論なし。官話にて刷を shwah と記すること、拗聲の存在せることを示す。此轉の三等韻は注意を要すべき點あり。此韻は wyén (ywén) 即ち yuén の格なれど、呉音にては怨、袁をヰヌ、翻、煩をホヌ、ボヌと呼ぶ、won の聲あり。翻、煩は漢音はハヌにて、官話も亦 fan にて寫す。呉音にて元、阮、願の ngwyén をグヮヌ、月の ngwyét をグヮッと言ふは、三等韻の聲ならず。廣韻の反切、翻は孚袁切、煩は附袁切、元は愚袁切なれば、ホヌ、グヮヌ等は原音には非ざるべし。反は漢音ハヌ、呉音ホヌなれど、又ヘヌの音あるは、三等の位なると、廣韻の府遠切なるとに協ふ。此韻第二十一轉と同じく、en と on とに通へる聲なりしが如し。此聲聊か緩みを生じて、脣音は輕に移る。四等韻は wén なりしな

るべきは、開轉に準ず。その喩母の下に在る者は、ウの音を失ひて、エヌ、エッの假名と爲る。

外轉第二十三開。

| | | |
|---|---|---|
| 寒 | ˏán | アヌ |
| 刪 | ˏyáu | ヤヌ |
| 仙 | ˏyén | エヌ |
| 先 | ˏén | エヌ |
| 旱 | ˊán | アヌ |
| 潸 | ˊyán | ヤヌ |
| 獮 | ˊyén | エヌ |
| 銑 | ˊén | エヌ |
| 翰 | án˺ | アヌ |
| 諫 | yán˺ | ヤヌ |
| 線 | yén˺ | エヌ |
| 霰 | én˺ | エヌ |
| 曷 | át˻ | アッ |
| 黠 | yát˻ | ヤッ |
| 薛 | yét˻ | エッ |
| 屑 | ét˻ | エッ |

此轉は第二十一轉と、韻の聲相近し。兩者二等韻の區別容易く判じ難し。他等の韻の性質の異なる所より推して、考察を下すことを得るのみ。此轉の三等韻の吳音には、オヌの聲なく、皆エヌの聲



なり。兩轉の四等韻には、聊か異なる所ありたりと見え、前者の牙音の下、甄は廣韻居延切にして、音字拗聲、韻字直聲の形なれど、後者の牙音の下、堅は廣韻古賢切にして、双方直聲の音和正法の形なり。此別假名又羅馬字にては表はし難し。

外轉第二十四合。

| | | |
|---|---|---|
| 桓 | ˏwán | ワヌ |
| 刪 | ˏwyán | ウヤヌ |
| 仙 | ˏwyón | エヌ |
| 先 | ˏwén | エヌ |
| 緩 | ˊwán | ワヌ |
| 潸 | ˊwyán | ウヤヌ |
| 獮 | ˊwyén | エヌ |
| 銑 | ˊwén | エヌ |
| 換 | wán˺ | ワヌ |
| 諫 | wyán˺ | ウヤヌ |
| 線 | wyén˺ | エヌ |
| 霰 | wén˺ | エヌ |
| 末 | wát˻ | ワッ |
| 黠 | wyát˻ | ウヤッ |
| 薛 | wyét˻ | エッ |
| 屑 | wét˻ | エッ |

説明第二十三轉に同じ。

## 外轉第二十五開。

| | | |
|---|---|---|
| 豪 | ˏáu | アウ |
| 爻 | ˏyáu | ヤウ |
| 宵 | ˏyéu | エウ |
| 蕭 | ˏéu | エウ |
| 晧 | ˊáu | アウ |
| 巧 | ˊyáu | ヤウ |
| 小 | ˊyéu | エウ |
| 篠 | ˊéu | エウ |
| 號 | áu˩ | アウ |
| 效 | yáu˩ | ヤウ |
| 笑 | yéu˩ | エウ |
| 嘯 | éu˩ | エウ |

**官話**、**江南音**共に、一等、二等は直拗の別明かなれど、二等、三等、四等の諸韻は、共に拗聲を用ゐて、同形にて表はす。今等位と**廣韻**の反切とを考へ合はせて、表の如き別を設く。暴の去聲號、入聲屋、告の去聲號、入聲沃、較覺の去聲效、入聲覺、樂の去聲效、入聲藥に分れ屬し、其入聲の尾音は、皆k(ク)なるを見れば、此轉は喉韻なりと斷ず。



## 外轉第二十六開。

| | | |
|---|---|---|
| 宵 | ˏéu | エウ |
| 小 | ˊéu | エウ |
| 笑 | éu˩ | |

**發輝**は此轉を第二十五轉の中に合はせ置く。**磨光**は此轉第二十五轉の四等と全く同じく、但し宵、小、笑の第四等は、屬すべき所無きが故、分けて此轉を立つるのみと記す。さすれば更に疑あり、曰く何故に四等韻に、蕭、笑、嘯と宵、小、笑との別あるかと。此別容易く判じ難しといへども、牙音の字を取りて、**廣韻**に徵するに、一は音

韻兩字直聲、一は音字拗聲、韻字直聲の反切法を用ゐるを見る。即ち蕭の韻の驍は古堯切、堯は五聊切なるに、宵の韻の蹻は去遙切、翹は渠遙切なるが如し。以て兩轉の四等韻に、聊か別ありしを知るべし。

内轉第二十七開。

| | | |
|---|---|---|
| 歌 | ʿó | オ |
| | | |
| | | |
| | | |
| 哿 | ʿó | オ |
| | | |
| | | |
| | | |
| 箇 | ó | オ |
| | | |
| | | |
| | | |

漢吳兩音、梵漢對譯等は、a(ア)の聲なれど、韻鏡は、官話、江南音と共に ó(オ)の聲なり。漢魏及び六朝初期の古韻にては、歌の韻は屢々麻の韻と往來せり。麻の韻は元來模、魚の韻より分れ出でたる者なれば、ó と á の變化は、其間に生じたることとなるべし。



内轉第二十八合。

| | | |
|---|---|---|
| 戈 | ʿwó | ヲ |
| | | |
| | ʿwyó | ウョ |
| | | |
| 果 | ʿwó | ヲ |
| | | |
| | | |
| | | |
| 過 | wó | ヲ |
| | | |
| | | |
| | | |

説明は第二十七轉に同じ。右兩轉は第二十三、第二十四の兩轉に通ふことあり。播、瘴、儺、涴は第二十七、第二十八、兩轉の韻に屬する

字なり。然るに其諧聲字の音符、番、單、難、宛は、第二十三、第二十四兩轉の韻に屬し、其尾音のn(ヌ)なるを見れば、共に舌韻なるを示す。

外轉第二十九開。

| | | |
|---|---|---|
| 麻 | | |
| | ʿyá | ヤ |
| | ʿyé | エ |
| | ʿé | エ |
| 馬 | | |
| | ʿyá | ヤ |
| | ʿyé | エ |
| | ʿé | エ |
| 禡 | | |
| | yá | ヤ |
| | yé | エ |
| | é | エ |

此轉に就きて、疑問の起るべきは、三等、四等兩韻の記法なりとす。漢音は二等韻は直聲なれど、他は拗聲にして、ャの假名にて表はし、吳音は二等、三等兩韻は拗聲なれど、四等韻は直拗兩聲相混ず。

此類古音にはェの假名多し。官話は概して本圖の記法に協ふ。二等韻の又は漢音サ、吳音シャ、官話(ch'a, 三等韻の舍は、漢吳兩音シャ、官話shie,)四等韻の些は、漢音シャ、吳音ジャ、官話(sie なり。此轉官話に則り、yia, yie, ie と記すること或は可なるべし。

外轉第三十合。

| | | |
|---|---|---|
| 麻 | | |
| | ʿwyá | ウャ |
| | | |
| | | |
| 馬 | | |
| | ʿwyá | ウャ |
| | | |
| | | |
| 禡 | | |
| | wyá | ウャ |
| | | |
| | | |

第二十九、第三十、兩轉の韻の一部は、漢以前は、第十一、第十二、兩轉の韻に合し、他の一部は、漢以後に、第二十七、第二十八、兩轉の韻より分れ入れり。亞、下、車、者、乍、牙、華は前者の例にして、苛、加、化、瓦、差、碓、麻は後者の例なり。麻の韻は、西漢の末期及び東漢の初期より、次第に模、魚の韻を離れて、歌の韻に近づき來りし形迹あり。又韻の變遷に隨ひて、その通ひし所の入聲も同じからず。乍は入聲鐸の韻、若は入聲藥の韻、射は入聲昔の韻に入り、諧聲字としては、亞を音符とせる惡は入聲鐸の韻、者を音符とせる著は入聲藥の韻、怕の音符白は入聲陌の韻、褲の音符席は入聲昔の韻に入れり。時の進むに隨ひ、平、上、去の三聲は、入聲と其緣を絶ち、遂に之を他の韻に移らしむるに至れるなり。何れにせよ、其系統より推して、兩轉の韻の喉韻なるを察し得べし。

內轉第三十一開。

| | | |
|---|---|---|
| 唐 | ɔ̂ng | オウ |
| 陽 | ɔ̂yong | ヨウ |
| 陽 | ɔ̂yong | ヨウ |
| 陽 | ɔ̂ng | オウ |
| 蕩 | ɔ̂ng | オウ |
| 養 | ɔ̂yong | ヨウ |
| 養 | ɔ̂ng | オウ |
| 宕 | ɔ̂ng' | オウ |
| 漾 | ɔ̂yong' | ヨウ |
| 漾 | ɔ̂yong' | ヨウ |
| 漾 | ɔ̂ng' | オウ |
| 鐸 | ɔ̂k, | オク |
| 藥 | ɔ̂yok, | ヨク |
| 藥 | ɔ̂yok, | ヨク |
| 藥 | ɔ̂k, | オク |

前に既に述べたるが如く、此轉の韻は ɔ̂ng 即ちオウの聲なり。漢音吳音はアウの聲にして、其假名の記法樣々なり。一等は漢吳アウ、二等は漢アウ、吳ヤウ、三等は脣音漢吳アウ、舌、齒、半舌、半齒の四音漢吳ヤウ、牙喉、兩音漢ヤウ、吳アウ、四等は漢ヤウ、吳アウなり。例へば當は漢吳タウ、霜は漢サウ、吳シヤウ、方は漢吳ハウ、長は漢吳チヤウ、章は漢吳シヤウ、良は漢吳リヤウ、穰は漢吳ジヤウ、强は漢

キャウ、**吳**ガウ、香は**漢**キャウ、**吳**カウ、相は**漢**シャウ、**吳**サウなるが如し。本居氏は此區別を訂正し、二等以下總べて**漢**ャウ、**吳**ァウと改めたれど、意却て到らず。太田氏の**漢吳**原音ャウ、次音ァウの別は最も當らず。直拗論に於いて陳べたるが如く、**吳音**は能く等位に協ふ。只三等韻は拗聲の格なるに、獨り牙喉兩音に伴ふときのみ直聲なるは、稍不審と爲すべき所なり。**廣韻**の反切に徵するも、**官話**、**江南音**に比するもその、拗聲なるべきこと論なし。脣音の拗より直に轉ずることあるは、此轉に限らざれば、別に怪しむに足らず。

此轉の ông の聲は、今の支那南音に存す。是は漢魏の古音の痕を留むるものなるべし。第十一、第十二、兩轉の韻と、第三十一、第三十二、兩轉の入聲韻と、密接なる關係ありしことは、前に既に說きたるが如し。噱は遽の入聲より强の入聲、縛は傅の入聲より防の入聲、莫は模の入聲より茫の入聲、落は路の入聲より浪の入聲に移りたるを見れば、o の聲の尾音を强めて k の如く響かせ、轉じて ông の韻の入聲となりたるものなるべし。故に ông（オウ）は古音にして、ang（アウ）は新音なりと判ぜざるを得ず。o の入聲は ŏ と促まり、後 ôk と延びて、ông の入聲に變はりしなり。

內轉第三十二合。

| | | |
|---|---|---|
| 唐 | ˂wông | ヲウ |
| | | |
| 陽 | ˂wyông | ウヰウ |
| | | |
| 蕩 | ˂wông | ヲウ |
| | | |
| 養 | ˂wyông | ウヰウ |
| | | |
| 宕 | wông˃ | ヲウ |
| | | |
| 漾 | wyông˃ | ウヰウ |
| | | |
| 鐸 | wôk˃ | ヲク |
| | | |
| 藥 | wyôk˃ | ウヰク |
| | | |

合轉の三等韻は、拗聲を落とすこと常なり。即ち wyông を wông と爲すが如し。**江南音**にても亦此聲を用ゐ、光を (kwông, 王を (wông と呼ぶ。

外轉第三十三開。

| | | |
|---|---|---|
| 庚清清 | (yang | ヤウ |
| | (yeng | エイ |
| | (eng | エイ |
| 梗靜靜 | ʿyang | ヤウ |
| | ʿyeng | エイ |
| | ʿeng | エイ |
| 諍敬勁 | yang) | ヤウ |
| | yeng) | エイ |
| | eng) | エイ |
| 陌昔昔 | yak› | ヤク |
| | yek› | エキ |
| | ek› | エキ |

二等韻は、**官話**、**江南音**共に**漢音**の如く、直聲 ang (アウ)を以て表はす。**吳音**獨り拗聲を用ゐること此圖に同じ。三等韻は**官話**、**江南音** ing 又 ying(イング)にて、二等韻と間隔あり。**漢音**エイ、**吳音**ヤウの格なれば、yang より ying に移る中間として、當時の聲は、**漢音**のエイの如く、yeng なるべかりしかと推斷す。隨つて四等韻は直聲 eng と爲るべし。**厦門音**は此轉尙 eng なり。

外轉第三十四合。

| | | |
|---|---|---|
| 庚清清 | (wyang | ウヤウ |
| | (wyeng | エイ |
| | (weng | エイ |
| 梗靜靜 | ʿwyang | ウヤウ |
| | ʿwyeng | エイ |
| | ʿweng | エイ |
| 諍敬勁 | wyang) | ウヤウ |
| | wyeng) | エイ |
| | weng) | エイ |
| 陌昔昔 | wyak› | ウヤク |
| | wyek› | エキ |
| | wek› | エキ |

二等は**漢吳**通例ワ音なれど、**吳**は時にヤ音を現はす。兩音共に喉

音の外、三等、四等にヱ音現はれず。喩母四等はヱの假名なり。

外轉第三十五開。

| | | |
|---|---|---|
| 耕清青 | | |
| | ʲyang | ヤウ |
| | ʲyeng | エイ |
| | ʲeng | エイ |
| 耿靜迥 | | |
| | ˈyang | ヤウ |
| | ˈyeng | エイ |
| | ˈeng | エイ |
| 諍勁徑 | | |
| | yang˺ | ヤウ |
| | yeng˺ | エイ |
| | eng˺ | エイ |
| 麥昔錫 | | |
| | yak˺ | ヤク |
| | yek˺ | エキ |
| | ek˺ | エキ |

此轉は第三十三轉と其形相似たり。三等韻清、靜、昔の如きは、兩轉に共通す。獨り去聲敬と勁と異なるのみ。合轉第三十四、第三十六の兩轉も同樣なり。

第三十六轉合。

| | | |
|---|---|---|
| 耕青 | | |
| | wyang | ウヤウ |
| | | |
| | weng | ウエイ |
| 迥 | | |
| | | |
| | | |
| | | |
| | weng | ウエイ |
| 諍徑 | | |
| | wyang | ウヤウ |
| | | |
| | weng | ウエイ |
| 麥錫 | | |
| | wyak | ウヤク |
| | | |
| | wek | ウエキ |

第三十三、第三十四、兩轉所屬の韻と、第三十五、第三十六、兩轉所屬の韻とは、其性質の差異容易く辨じ難し。庚耕、梗耿、諍諍、陌麥、清清、靜靜、敬勁、昔昔、清青、靜迥、勁徑、昔錫の別、其秘訣を探ること、韻學者の常に苦しむ所なり。古韻の變遷を考ふるに、庚の韻には、陽の韻より轉じ來れる者甚だ多し。庚、行、更、享、彭、は其例なり。又音符に由りて檢するに、圖に擧げたる閍、磅、盲、趨、瞠、棖、杭、鎗、觥、銑、諻、橫は、陽の

韻に緣故あれど、耕の韻は陽の韻と與らず。梗、耿兩韻の別も、之に準ずべし。陌の韻に屬する宅、蹟、格、額、迮、啞、赫は、明かに鐸の韻に關係あれど、麥の韻には此事なし。兵、明、京、卿、迎、英、兄は、古へは陽の韻に屬せしが、後清の韻に入れり。病、景、慶、競、映、詠は、古へは樣の韻に屬せしが、後敬の韻に入れり。第三十五、第三十六、兩轉の二等韻は第四十二、第四十三、兩轉の一等韻と緣故ありしものと見え、棚、朋、橙、瞪、宏、泓等は、登の韻より耕の韻に移り、幗、摑、蟈、馘等は、德の韻より麥の韻に移り入れり。

右の如き轉韻は、遠く東漢以前よりの歷史に屬すれど、隋唐の頃に至りても、尙其性質に差異ありたるものか、陸韻、唐韻共に庚耕其他の韻の類を分てり。是は唐陽の ông, yông より、耕青の yang に近づける者、中間に在りて獨立し、庚清の形を保ちたるものなるべし。北音にては唐陽の ông, yông も、亦次第に áng, yáng の聲に移れり。庚と耕との別は、一は唐陽に近く、一は之に遠きに由りたることなるべし。吳音にて淸靑の韻にャウの假名を附するは、庚淸又耕靑共に同聲の時代ありしを示す。yang(ヤウ)の yeng(ェイ)に移りたるは其後の轉聲なり。

二等韻より下りて三等韻の性質を考ふるに、第三十三轉の方にありては、重脣、牙、喉の三音、第三十五轉の方に在りては舌上、正齒、半齒、半舌の四音勢を占む。一は字母響硬く、一は字母響軟かなれば、之に伴ふ韻に、亦其聲强弱の別ありたるなるべしと推定す。四等韻は其別隱微なり。只牙音の下を見るに、第三十三、第三十四の兩轉の方は、去盈切輕、居正切勁、渠營切瓊の如く、反切に拗聲の音字を用ゐ、第三十五、第三十六の兩轉の方は、古靈切經、苦定切罄、口迥切褧の如く、反切に直聲の音字を用ゐるを常とす。是亦韻の聲の强弱を示すことなるべし。

右三等韻四等韻の關係後に說明す。

内轉第三十七開。

| | | |
|---|---|---|
| 侯 | ˏou | オウ |
| 尤 | ˏyiu | イウ |
| 尤 | ˏyiu | イウ |
| 幽尤 | ˏiu | イウ |
| 厚 | ˊou | オウ |
| 有 | ˊyiu | イウ |
| 有 | ˊyiu | イウ |
| 黝有 | ˊiu | イウ |
| 候 | ou˲ | オウ |
| 宥 | yiu˲ | イウ |
| 宥 | yiu˲ | イウ |
| 幼宥 | iu˲ | イウ |

一等韻は官話au（アウ）、江南音eu（エウ）と記す。假名は漢オウ、吳ウにて、漢音は本圖の音に近く、吳音は侯の韻の魚、模、虞の韻に通ひたる時代の古韻を示す。意ふにouはeuの聲に近き所ありたるなるべし。二等以下の韻は、官話、江南音共にiuの格なれど、時にau, eu



の聲となることあり。周收を官話にては（chau,（shau, 江南音にては（cheu,（sheu と記するが如し。此類吳音はウにて、古へ之の韻に通ひたることあり。有、郁、富、福の如く、此轉の韻は第一轉の入聲屋の韻に通ふを見れば、喉韻なるを知るべし。au, eu, iu の關係は、我音にては說き難し。

内轉第三十八開。

| | | |
|---|---|---|
| 侵 | | |
| | ˏyim | イム |
| | ˏyim | イム |
| | ˏim | イム |
| 寢 | | |
| | ˊyim | イム |
| | ˊyim | イム |
| | ˊim | イム |
| 沁 | | |
| | yim˲ | イム |
| | yim˲ | イム |
| | im˲ | イム |
| 緝 | | |
| | yip˲ | イフ |
| | yip˲ | イフ |
| | ip˲ | イフ |

脣、牙、喉三音に伴ふ三等韻に、呉音オムの假名を用ゐること、品をホム、金をコム、音をオムと記するが如し。故に此轉のim, ipはom, opに緣故ありと知るべし。此轉の韻は尾音mとnとの別にて、第十七轉の韻と相類す。

外轉第三十九開。

| | | |
|---|---|---|
| 覃 | ˏám | アム |
| 咸 | ˏyám | ヤム |
| 鹽 | ˏyém | エム |
| 添 | ˏém | エム |
| 咸 | ˊám | アム |
| 銜 | ˊyám | ヤム |
| 嚴 | ˊyém | エム |
| 添 | ˊém | エム |
| 勘 | ámˀ | アム |
| 陷 | yámˀ | ヤム |
| 豔 | yémˀ | エム |
| 桥 | émˀ | エム |
| 合 | áp | アフ |
| 洽 | yáp | ヤフ |
| 葉 | yép | エフ |
| 帖 | ép | エフ |

説明次轉に讓る。

外轉第四十合。

| | | |
|---|---|---|
| 談 | ˏám | アム |
| 銜 | ˏyám | ヤム |
| 嚴 | ˏyém | エム |
| 鹽 | ˏém | エム |
| 敢 | ˊám | アム |
| 檻 | ˊyám | ヤム |
| 儼 | ˊyém | エム |
| 琰 | ˊém | エム |
| 闞 | ámˀ | アム |
| 鑑 | yámˀ | ヤム |
| 釅 | yémˀ | エム |
| 豔 | émˀ | エム |
| 盍 | áp | アフ |
| 狎 | yáp | ヤフ |
| 業 | yép | エフ |
| 葉 | ép | エフ |

第三十九、第四十の兩轉は、其韻の區別、後世の音を以て判じ難し。年代遠きに過ぐといへども、先秦時代の古韻を參照するに、第三十九轉の諸韻には、第三十八轉の諸韻に屬せし者と、緣故ありし者甚だ多し。咸、參、南、男、覃、湛、僭、合、叶は其例なり。諧聲字の組織を觀るに、暗、含、探、湛、棼、壞、拉、笈、又覃、嵾、簪、稔、給は兩者の關係密接なりし

を示す。第四十轉の諸韻の、第三十八轉の諸韻に通ひし者ありしは至つて稀なり。尤、欠、今、金の、沈、飲、黔、銜に於けるが如きは、寧ろ例外に屬すべき、漢以後の轉音なり。古韻にては、第四十轉の方に屬したる坎、陷、耽、儋、斬、炎、奄、詹、溘、夾、沓、帀、揷、涉、牒、獵の類の、其系統を離れて第三十九轉に入り、第三十九轉の方に屬したる三、衫、銜、喊、厭、殲、潛、憸、儼、脅、跲の類の、其系統を脱して、第四十轉に移りたるは、時代變遷の結果として、免れ難き轉音なるべし。

第三十九轉の一等韻に屬する含、紺、南、曇、諳等を、**吳音**にてゴム、コム、ノム、ドム、オム等と書くことありて、第三十八轉の韻と同系なるを示し、その古韻に協ふことを明かにす。第四十轉の一等韻にも、同樣の例なきには非ざれど、見當ること多からず。覃談の兩韻は、庚耕の兩韻の如く、隋唐の頃には、其聲相近かりしと雖も、其性質に於いては、尙差異ありたるものなるべし。二等韻の別は、一等韻に準じ、而して共にヤムの聲なりしが如し。

三等韻は共にエムの格なれど、**吳音**にはオム、オフの聲ありて、第三十九轉の鉗をゴム、第四十轉の嚴をゴム、業をゴフと記する例あり。第三十九轉の三等韻には、第三十八、第四十兩轉の韻より移れる者、殆ど相半す。然るに第四十轉には、第三十八轉より移れる者、其數甚だ少し。聊か以て第三十九、第四十、兩轉の三等韻の本來の性質に於いて、異なりし所ありしを窺ひ知るべし。第三十九轉、三等所屬の字なる奄を、アムの聲に用ゐたる例あり。これ**韻鏡**とは程隔たりたる時代の古音なりしが如し。

第三十九、第四十兩轉の四等韻の別は隱微なり。第三十九轉、牙音所屬の字は、古甜切兼、苦兼切謙の如く、**廣韻**の反切は音字韻字共に直聲なり。第四十轉の方は、牙音を缺く。これ音字拗聲、韻字、直聲の反切を用ゐるべき位置なり。尾音mとnとの差にて、第三十九

轉は第二十三轉に、第四十轉は第二十一轉に類す。

外轉第四十一合。

| | | |
|---|---|---|
| 凡 | | |
| | | |
| | ˏwyém | ウエム |
| | | |
| 范 | | |
| | | |
| | ˊwyém | ウエム |
| | | |
| 梵 | | |
| | | |
| | wyém˩ | ウエム |
| | | |
| 乏 | | |
| | | |
| | wyép˩ | ウエフ |
| | | |

此合轉は、第三十九と第四十との、何れの開轉に對次すべきか、自ら生ずべき問題なり。此轉所屬の字に就きて考ふるに、其關係兩轉に跨る者あり。故に均しく兩轉に對する者と見て、差支なかるべし。脣音は第二十二轉と共に、外轉三等韻の輕脣音にして、是も



漢音アム、呉音オムの格なり。即ち凡は vwyém なれど、漢ハム (ˏfam)、呉ボム (ˏvom)、入聲法は fwyép なれど、漢ハフ (fap˩)、呉ホフ (fop˩) と爲る。凡は官話 (fan、江南音 (ˏvan、法は官話、江南音共に fap˩ なり。脣音の輕と爲るは、第二十二轉と同じく、母韻變化に從ひて、其音に緩みを生じたるに由ることとなるべし。

内轉第四十二開。

| | | |
|---|---|---|
| 登 | ˏong | オウ |
| 蒸 | ˏyong | ヨウ |
| 蒸 | ˏyong | ヨウ |
| 蒸 | ˏong | オウ |
| 等 | ˊong | オウ |
| 拯 | ˊyong | ヨウ |
| 拯 | ˊyong | ヨウ |
| | | |
| 嶝 | ong˩ | オウ |
| | | |
| 證 | yong˩ | ヨウ |
| 證 | ong˩ | オウ |
| 德 | ok˩ | オク |
| 職 | yok˩ | ヨク |
| 職 | yok˩ | ヨク |
| 職 | ok˩ | オク |

支那音の奇なることは、適切に我假名のオ、又羅馬字のoに當るべき聲なきが如し。此轉の一等韻は、第十七轉の一等韻、又第三十七轉の一等韻と、類を同じうし官話はang、江南音はengにて寫す。故にongはengに近き所ありたるべしと推察す。崩登を官話にて(pang、(tang、江南音にて(peng、(tengと記す。入聲の北は官話は江南音の如くpeh)と呼び、江南音は又poh)とも唱ふ。德は官話、江南音共にteh)と言ふ。二等韻にも亦此聲ありて、官話にて側をtseh)、色をseh)と記して、之に對する三等韻職のchih)、識のshihと分つを見る。三等韻はyongなるか、yingなるか、疑問の起る所なり。漢音、吳音共にョウ、オウの假名なり。吳音は牙喉兩音は平聲殑のゴウ、入聲極のゴク、去聲應のオウ、入聲憶のオクの如く相協へど、他は然らず。平聲澄のヂョウ、入聲直のヂキ、去聲乘のジョウ、入聲食のジキの如きは相協はざる例なり。官話はingにして、吳音の入聲に通ふ。澄をching、乘をshingと記するが如し。牙喉音の殑應も、king、yingと記す。江南音は二等、三等、四等の諸韻を通じてengの聲なり。四等韻は三等韻と直拗の差あるのみ。ong、eng、ingは、其聲相近しと知るべし。

内轉第四十三合。

| | | |
|---|---|---|
| 登 | (wong | ヲウ |
| | | |
| | | |
| | | |
| | | |
| | | |
| | | |
| | | |
| | | |
| | | |
| 德 | wok | ヲク |
| | | |
| 職 | wyok | ゥョク |
| | | |

第四十二轉の説明に從ひ、一等韻のwong、wokは、weng、wekに近く、

三等韻の wyok は wyik に近き聲なりしと知るべし。

## 餘論。

餘論として更に左の諸轉の特徴を考査すべし。

第十三轉對第十五轉。
第二十一轉對第二十三轉。
第二十五轉對第二十六轉。
第三十三轉對第三十五轉。
第三十九轉對第四十轉。

各開轉に對する合轉あるものは、開合相準ずるものとす。

右五類共通の特質左の如し。

一、一韻にして、相對する轉の一方にては三等、他方にては四等に位する者あること。

二、右の場合には、其四等韻に對する三等韻は全く舌、齒、半舌、半齒、の四音を缺くか、或は稀に之あるも、其勢力至つて微なること、但し第十五、第二十六の兩轉には三等韻なし。

三、右の四等韻牙音の下、**廣韻**は音字拗聲、韻字直聲の反切を用ゐること。

四、右同韻の、他轉の三等に位するとき、脣、舌、牙、齒、喉、半舌、半齒の七音を具備するを常とすれど、時には脣、牙、喉の音を缺くことあること。

五、右の場合には、之に接する四等韻牙音の下、**廣韻**の反切は音字直聲、韻字直聲の音和正法を用ゐるを常とすること。

以上の如き法則ある者は ei(エイ)、en(エヌ)、eu(エウ)、eng(エイ)、em(エム)の如く、皆 e(エ)の母韻を有する外轉の諸韻なり。

左に兩々互に緣故ある諸轉の、三等四等の兩韻を對照すべし。

第十三轉。　○齊　祭霽

第十五轉。　○○　○○　○祭

第十三轉の去聲祭は脣音の外六音を備ふ。

第二十一轉。　元仙　阮獮　願線　月薛

第二十三轉。　仙先　獮銑　線霰　薛屑

第二十一轉の三等韻は脣、舌、齒、半舌、半齒の五音を缺く、但し第二十二の合轉には脣音あり。

第二十三轉の三等韻は七音を備ふ。

第二十五轉。　宵蕭　小篠　笑嘯

第二十六轉。　宵　小　笑

第二十五轉の三等韻は七音を備ふ。

第三十三轉。　清清　靜靜　敬勁　昔昔

第三十四轉。　清青　靜迥　勁徑　昔錫

第三十三轉の三等韻は、舌音ありと雖も殆ど例外なり。齒音、半舌音、半齒音は無し。

第三十五轉の三等韻は脣、牙、喉、半齒の四音を缺く。

第三十九轉。　鹽添　琰忝　豔㮇　葉帖

第四十轉。　嚴鹽　儼琰　釅豔　業葉

第三十九轉の三等韻は七音を備ふ。

第四十轉の三等韻は舌、齒、半舌、半齒の四音を缺く。

兩轉に跨る同韻の、三等に位する諸轉の韻は、其聲滑かにして軟かく、その四等に位する諸轉の韻は、其聲麤にして硬かりしものかと察せらる。

先づ第十三轉と第十五轉との關係より說くべし。

祭は元來拗韻なりしなるべし。第十三轉の三等に位するとき、其下の四等韻霽と拗直相對し、形式相整ふ。祭の第十五轉四等に位する者は、拗聲より直聲に轉じたるものゝ如し。牙音は尙

其形迹を留め、廣韻にては音字拗聲韻字直聲の反切を示す。

| | | | |
|---|---|---|---|
| 牙音 | 疑母 | 藝　魚祭切 | 音字拗　韻字直 |

第二十一轉と第二十三轉とは、其差異を示すこと更に明かなり。

第二十三轉の三等韻、仙、獮、線、薛は拗聲にして、仙、獮、線の脣音を缺く外、七音を備へ、其下に位する四等韻、先、銑、霰、屑は直聲にして、銑の半舌音を缺く外、半齒音を除き、他の六音を列ねて、三等四等拗直相對し形式相整ふ。

第二十一轉の三等韻、元、阮、願、月には、響の鋭き牙喉音のみにて、滑かなる舌、齒、半舌、半齒の四音なし。仙、獮、線、薛の直聲に轉ぜんとする傾向ある者を取り出だし、四等韻と爲して、之に對せしむ。これ皆いはゆる齊齒呼の、軋るが如き聲を有する韻なり。四等韻仙の代表字を取りて、廣韻の反切を吟味すべし。

| | | | |
|---|---|---|---|
| 幫母 | 鞭　卑連切 | 音字直 | 韻字拗 |
| 脣音 | 敷母 | 篇　芳連切 | 同　拗　同　拗 |
| | 奉母 | 楩　房連切 | 同　拗　同　拗 |
| | 微母 | 緲　武延切 | 同　拗　同　直 |
| 牙音 | 見母 | 甄　居延切 | 同　拗　同　直 |
| 喉音 | 喻母 | 延　以然切 | 同　直　同　拗 |

右の如く拗聲を含める者甚だ多し。先、銑、霰、屑の韻には、此の如き例あるを見ること稀なり。この音韻兩字直聲の反切の方は其例を省く。以下皆同じ。

韻鏡と廣韻とは、音を同じうせざる者あるべしと雖も、聊か四等韻排列の秘訣を窺ふことを得べし。

第二十五轉と第二十六轉との關係も、粗前同樣にして、宵、小、笑と、蕭、篠、嘯の區別も、拗直の差異なりしが如し。

第二十五轉の三等韻、宵、小、笑は拗聲にして七音を備へ、直聲の

蕭、篠、嘯を其下の四等に位せしめて形式を整ふ。

第二十六轉に分れ出てて、四等韻となりたる宵、小、笑には、拗聲の傾向ある者多し。平韻宵より例を出だして廣韻の反切に徵す。

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 脣音 | 非母 | 飄 | 甫遙切 | 音字拗　韻字直 |
| | 敷母 | 漂 | 撫招切 | 同　拗　同　拗 |
| | 奉母 | 飄 | 符霄切 | 同　拗　同　直 |
| | 明母 | 幖 | 彌遙切 | 同　直　同　直 |
| 牙音 | 溪母 | 蹻 | 去遙切 | 同　拗　同　直 |
| | 羣母 | 翹 | 渠遙切 | 同　拗　同　直 |
| 喉音 | 影母 | 要 | 於宵切 | 同　拗　同　直 |
| | 喻母 | 遙 | 餘昭切 | 同　直　同　拗 |

第三十三、第三十五の兩轉は、三等韻平聲清、上聲靜、入聲昔、共通なり。獨り去聲には敬と勁との別あり。清、靜、勁、昔と青、迥、徑、錫とは、其聲に拗直の別ありたるものゝ如し。

三等韻を脣、牙、喉と舌、齒、半舌の音を有する者とに分ち、第三十三、第三十五の兩轉に分れ屬せしめたるは、共に齊齒呼にして、一は其聲の鋭く、一は其聲の滑かなりしを示す。清、靜、勁、昔所屬の字の直聲に傾く者を、第三十三轉の四等に移し、直聲の青、迥、徑、錫を、第三十五轉の四等に位せしめたるは、其說明他に同じ。

第三十三轉四等韻の廣韻の反切の例左の如し。

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 脣音 | 非母 | 并 | 府盈切 | 音字拗　韻字直 |
| | 微母 | 名 | 武并切 | 同　拗　同　直 |
| 牙音 | 溪母 | 輕 | 去盈切 | 同　拗　同　直 |
| | 羣母 | 頸 | 巨成切 | 同　拗　同　拗 |
| 喉音 | 影母 | 嬰 | 於盈切 | 同　拗　同　直 |

喉音　喩母　盈　以成切　音字直　韻字拗

第三十九轉と第四十轉との關係も、其說明粗他に同じ。鹽、琰、豔、葉は拗聲にして、添、忝、㮇、帖は直聲なるべきこと、其說明も亦同じ。

第三十九轉の三等韻、鹽、琰、豔、葉は拗聲にして七音を備へ、其下に連なる、四等韻添、忝、㮇、帖は直聲にして、兩者能く相對次す。

第四十轉の嚴、儼、釅、業は牙喉の二音のみを備へ、鹽、琰、豔、葉の一部の、變調を現はせる者を取りて、其下に配せしむ。

以上に擧げたる、相對兩轉の、牙音四等韻の文字に附する、廣韻の反切は、既に其各轉の下にて述べ、又再び證例に引きたるが如く、其差別顯著にして、脣喉の兩音所屬の文字亦之に次ぐ。發輝は兩轉に跨れる同韻を一方に移し、祭祭、仙仙、宵宵、清清、鹽鹽の如く、三等四等を排列して、其形式を改めたれど、これ未だ韻鏡の原作者の、苦心の秘訣を悟り得ざるものと謂ふべし。

前記の諸轉の性質に稍類似する所あるを以て、更に第三十七轉に就いて、聊か考慮を回らすべし。只此轉と他の諸轉とは、內轉外轉の差あるを忘るべからず。此轉の四等韻に尤、有、宥と幽、黝、幼との別あれど、韻鏡にては双方を併記せるが故、此別人をして判斷に苦しましむることあり。今精しく之を正せば、多少の例外無きには非ざれど、一般に齒音と喉音の喩母の下にある者とは、尤、有、宥に屬し、脣、牙、喉の三音の下にある者は、幽、黝、幼に屬するを見る。この幽、黝、幼の類につき、平韻より例を取りて、之を廣韻に徵するに、音字拗聲、韻字直聲の反切、多きこと左の如し。

脣音
- 非母　彪　甫然切　音字拗　韻字直
- 並母　漲　皮彪切　同　拗　同　直
- 微母　繆　武彪切　同　拗　同　直
- 見母　樛　居虯切　同　拗　同　直

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 牙音 | 溪母 | 怵 | 去秋切(尤) | 音字拗　韻字直 |
| | 羣母 | 虯 | 渠幽切 | 同拗　同直 |
| | 疑母 | 聱 | 語虯切 | 同拗　同直 |
| 喉音 | 影母 | 幽 | 於虯切 | 同拗　同直 |
| | 曉母 | 蠦 | 香幽切 | 同拗　同直 |
| 半舌音 | 來母 | 鏐 | 力幽切 | 同拗　同直 |

内轉にて半舌音の四等韻に伴ふ者は此字のみなり。

第三十七轉は前に既に述べたるが如く、第一轉と其性質相似たる所多し、即ち此轉は内轉に屬し、四等韻に齒音と喉音の喩母に屬する者との獨立する格に相當す。侯、厚、候、尤、有、宥の韻は是なり。幽、黝、幼は其響稍强く、元來第二十六轉の、第二十五轉に對するが如く、分れて別に一轉を作るべき格なれど、其所屬の字少きが故、尤、有、宥の中に、籍を同じうしたるものなるべし。

次に母韻 a o e i の關係につきて、卑見を述ぶべし。

一等韻にて a o e の關係あるものは、第十七、第十八兩轉、第三十七轉及び第四十二、第四十三兩轉なり。第十七、第十八兩轉は an, on, en, 第三十七轉は au, ou, eu, 第四十二第四十三兩轉は ang, ong, eng の變化あることは、其各轉の下に於いて說きたるが如し。此等の諸轉は皆内轉に屬するが故、**官話**の an, au, ang は取らざることと爲し、我音の on, ou, ong と、**江南音**の en, eu, eng とを推し較べ、又他等の韻とを考へ合はせて、**韻鏡**の音は œn, œu, œng の類にて、其母韻は œ の約まりて、一聲と爲りたる者なるべしと思惟す。二等韻は齒音のみにて、之に三等韻と同形の羅馬字を當て置きたるが、**官話**、**江南音**共に e の母韻にて寫す例あるを見れば、此韻は拗聲にて、他音と異なる特性を有する齒音と結びて、一等韻の œ の聲を持續し、yœn, yœu, yœng の如く、響きたるに非ざるか。されど、

yœ とyeとには、猶間隔ありて、一は內轉、一は外轉の聲なりと知るべし。第八轉は第四十二轉と同族なるが故、此二等韻も亦類似の母韻なりしなるべし。

三等韻は、第八轉、第十七、第十八兩轉、第十九、第二十兩轉、第三十七轉、第三十八轉、及び第四十二、第四十三兩轉に、其母韻にoとiとの關係あり。**官話**、第八轉はïn, 第十七、第十八兩轉はïr, 第十九、第二十兩轉は同じくïr, 第三十七轉はïu, 第三十八轉はïn (ïm), 第四十二、第四十三兩轉は ing なるが、**吳音**に、第八轉、第三十七轉にo、第十七、第十八兩轉にon, 第十九、第二十兩轉に同じくon, 第三十八轉にom, 第四十一、第四十三兩轉にong (オウ)の聲を現はすことあり。是より推して此等の諸轉の三等韻の**韻鏡**の音は、其母韻oiの約まりて一聲となりたるものにして、yoi, yoin, yoiu yoim, yoing と響きたるものなるかと察せらる。**漢音**は第四十二、第四十三兩轉の外、概して**官話**に同じ。**江南音**にはyeの聲多し。牙喉兩音の**吳音**に、殊にoの聲あるは、其兩音は他に比して響强きが故、際立ちて斯く聞こえたるものなるべし。第十九、第二十兩轉と緣故ある、第九、第十兩轉は、第四、第五兩轉の如く、eiの母韻に近かりしかと思はるゝに、又 oi の母韻に通ひたるを見れば、其三等韻は、yei とyoiとの間に響きたるものなるべし。四等韻は、第八轉の齒音に**官話**u、第四十二轉の**漢音**に、oの聲ある外は、皆直聲のiの母韻なりしが如し。三等韻と四等韻とを對照するに、拗聲となる場合に、oiの如き母韻變化を生ずるものと見做すべし。三等韻の yoi, yoin, yoiu, yoim, yoing, に對し、四等韻はi(u), in, in, im, ing (ong) なり。

**外**轉の三等韻にa o eの母韻變化あるものは、第二十一、第二十二兩轉、及び第四十、第四十一兩轉に多し。是皆三等韻に、脣牙喉三音の勢力を有する諸轉なり。開轉の方、牙喉音の下、第二十一轉は

漢音エヌ、呉音オヌ、第四十轉は漢音エム、呉音オムなり、即ちyenとyon, 又yemとyomとの關係なり。此母韻はœなるべけれど、外轉なるが故開音にして、内轉の閉音のœ̃とは其響同じからず。韻鏡の音は、yœ̃n, yœ̃mの類なりしかと推斷す。合轉の方、第二十二轉には、漢呉兩音の間に、ッヌ、チヌ、エヌ、又第四十轉には、ワム、チム、エムの變化あり。これ一はwan, won, wen, 一はwam, wom, wemの變化にして、韻鏡の音は、wyœ̃n, wyœ̃mの類なりしかと考察す。wan, wamは、轉音にして三等韻の原形に非ず。

右の類の外aiのeとなり、aiのoと爲るが如き轉音は、普通の例なれば、説明の要なかるべし。

附記

音韻圖の諸轉の韻の頭に擧げたる、古韻十六攝の通江止遇蟹臻山效果假宕梗流深咸曾は、緣故近くして相通へる者を一括して大別したる分類なり。是は漢魏以前の分類とは、相符合せざることと明かなれば、かゝる分類法ありたりとせば、其以後の者なるべきこと論なし。強ひて其時代を推測すれば、隋唐以前南北朝の末期を指せるが如し。意ふに此別は、後世の考證家の考ふるが如き、精確の者には非ざるべし。

諸本無尾韻の下に入聲韻を擬すれど、當らざる者あり、精しからざる者ありて、概して皆則り難し。韻に喉、舌、脣の三類ありて、有尾韻と無尾韻と、相通ひたるものなれば、有尾韻の入聲を以て、同類の無尾韻の入聲に律すること正當なり。左に同類の有尾韻無尾韻を對照すべし。

有尾喉韻。

第一、第二、第三、第三十一、第三十二、第三十三、第三十四、第三十五、第三十六、第四十二、第四十三の諸轉。

無尾喉韻。
第四、第五、第八、第十一、第十二、第二十五、第二十六、第二十九、第三十、第三十七の諸轉。
有尾舌韻。
第十七、第十八、第十九、第二十、第二十一、第二十二、第二十三、第二十四の諸轉。
無尾舌韻。
第六、第七、第九、第十、第十三、第十四、第十五、第十六、第二十七、第二十八の諸轉。
他の第三十八、第三十九、第四十、第四十一の諸轉は脣韻なり。
二百六韻の排列につき、左に疑問を列記す。
一、東より起り凡にて終る、唐韻、廣韻の順序は、如何なる標準に據りたるものか。

二、韻鏡にては、第一轉、東、董、送、屋より起り、特に第四十二、第四十三轉、登蒸等拯、嶝證、德職にて終るは、如何なる理由に基づきたるものか。
三、第一轉にては平聲東、上聲董、去聲送、入聲屋、皆一韻なるに、第二轉にては平聲一等冬、三等、四等鍾、上聲三等、四等腫、去聲一等宋、三等、四等用、入聲一等沃、三等、四等燭なり。同類の兩轉にて、韻の配置に、此の如き別あるは如何。
四、第三十三轉、三等、四等の韻は、平聲清、上聲靜、入聲昔なるに、獨り去聲のみ、三等韻敬と、四等韻勁と、形を異にするは如何。
五、同轉二等韻は、平聲庚、上聲梗、去聲諍、入聲陌、又第三十五轉二等韻は、平聲耕、上聲耿、去聲諍、入聲麥なり。去聲諍のみ、他と異なりて、兩轉に跨るは如何。
六、第四と第五、第六と第七、第九と第十、第十三と第十四(一等韻を

除く)第十五と第十六、第十七入聲一等韻と第十八入聲一等韻、第二十一と第二十二、第二十三と第二十四(一等韻を除く)、第二十九と第三十、第三十一と第三十二、第三十三と第三十四、第三十五と第三十六、第四十二と第四十三は、開合兩轉韻を同じうし、第十三の一等韻と第十四の一等韻、第十七と第十八、第十九と第二十、第二十三の一等韻と第二十四の一等韻、第二十七と第二十八との各兩轉、第三十九、第四十、第四十一の三轉は、開合韻を異にするは如何。

右の外、更に又左の重要なる疑問あり。

第三轉の江の韻の性質如何。六朝中期の詩家の押韻法に、東冬江は尙同律に用ゐられたるを見る。案ずるに江は pyong, kyong, hyong, syong の如き拗聲にて、後東冬の類より分れ出でたるものならんか。此韻現今の南音にては、延びて拗聲を失ひ、ông の聲となりたる者多し。yong は隋唐の時代、北音の yáng と爲り、乃ち韻鏡にては外轉に屬するに至れるなり。第三十一、第三十二兩轉の唐陽の韻は、既に示したるが如く、ông, yông の聲にて、內轉の特質を具備し、南音の系統に屬し居りたること明かなり。第三轉の北音なると、第三十一、第三十二兩轉の南音なるとは、互に相矛盾して、韻鏡の產地を明かにすること能はず。意ふに第三轉は元內轉なりしを、北地の人、之を改めて外轉に作りしに非ざるか。さすれば韻鏡の江左音なりしこと自ら決定すべし。今香港を hông kông と呼ぶ、これ南音にして、香は第三十一轉陽の韻、港は第三轉講の韻に屬す。唐代の江左音にては、之を hyông kyông と讀みたるべきに似たり。北音にては hyáng kyáng なり。何れにしても、兩字一方南音にして、一方北音なるは、調和し難きこと論を俟たず。

## 第六章　音韻圖使用法　漢吳音還原法

韻鏡の音韻として假定せる、七音三十六字母と、二百六韻とを組合はせ、音韻圖に由りて、當時の音聲を探ることを試むべし。世人の洽く知る所の、張繼が楓橋夜泊の詩を以て例題と爲す。

月　外轉第二十二合、牙音疑母、入聲三等月の韻に屬し、音 ng 韻 (wyét) にして、ngwyét なり。

落　內轉第三十一開、半舌音來母、入聲一等鐸の韻に屬し、音 l 韻 (ôk) にして、lôk なり。

烏　內轉第十二合、喉音影母、平聲一等模の韻に屬し、音 i 韻 (wo) にして、iwo なり。

啼　外轉第十三開、舌音定母、平聲四等齊の韻に屬し音 d 韻 (ei) にして、dei なり。



霜　內轉第三十一開、齒音審母、平聲二等陽の韻に屬し、音 s 韻 (yông) にして、sông なり。

滿　外轉第二十四合、脣音明母、上聲一等緩の韻に屬し、音 m 韻 (wán) にして、mwán なり。

天　外轉第二十三開、舌音透母、平聲四等先の韻に屬し音 t' 韻 (ên) にして、t'én なり。

江　外轉第三開、牙音見母、平聲二等江の韻に屬し、音 k 韻 (yáng) にして、kyáng なり。

楓　內轉第一合、脣音非母、平聲三等東の韻に屬し、音 f 韻 (yung) にして、fyung 即ち fung なり。

漁　內轉第十一開、牙音疑母、平聲三等魚の韻に屬し、音 ng 韻 (yo) にして、ngyo なり。

火　內轉第二十八合、喉音曉母、上聲一等戈の韻に屬し、音 h 韻 (wó

にして、(hwó なり。

對　外轉第十四合、舌音端母、去聲一等隊の韻に屬し、音 t 韻 (wái) にして、(twái) なり。

愁　內轉第三十七開、齒音牀母、平聲二等尤の韻に屬し、音 dz 韻 (yiu にして、(dziu なり。

眠　外轉第二十三開、脣音明母、平聲四等先の韻に屬し、音 m 韻 (én にして、(mén なり。

姑　內轉第十二合、牙音見母、平聲一等模の韻に屬し音 k 韻 (wo にして、(kwo 即ち (ko なり。

蘇　同轉、齒音心母、平聲一等模の韻に屬し、音 s 韻 (wo にして、(swo 即ち (so なり。

城　外轉第三十五開、齒音禪母、平聲三等淸の韻に屬し、音 z 韻 (yeng にして、(zeng なり。

外　外轉第十六合、牙音疑母、去聲一等泰の韻に屬し、音 ng 韻 (wái) にして、(ngwái) なり。

寒　外轉第二十三開、喉音匣母、平聲一等寒の韻に屬し、音 i' 韻 (án にして、(i'án なり。

山　外轉第二十一開、齒音審母、平聲二等山の韻に屬し、音 s 韻 (yán にして、(sán なり。

寺　內轉第八開、齒音邪母、去聲四等志の韻に屬し、音 z 韻 (i' にして zi) なり。

夜　外轉第二十九開、喉音喩母、去聲四等禡の韻に屬し、音 y 韻 (é にして、(yé) なり。

半　外轉第二十四合、脣音幫母、去聲一等換の韻に屬し、音 p 韻 (wán にして、(pwán) なり。

鐘　內轉第二開、齒音照母、平聲三等鐘の韻に屬し、音 tɕ 韻 (yong に

して（tsong なり。

聲　外轉第三十五開、齒音審母、平聲三等清の韻に屬し、音 ʂ 韻（ʑeng にして、（ʂeng なり。

到　外轉第二十五開、舌音端母、去聲一等號の韻に屬し、音 t 韻（tau）にして、（táu）なり。

客　外轉第三十三開、牙音溪母、入聲二等陌の韻に屬し、音 k' 韻（yak）にして、（k'yak）なり。

船　外轉第二十四合、齒音牀母、平聲三等仙の韻に屬し、音 dʑ 韻（wyén にして、（dʑwén なり。

右の諸例に由りて、音韻圖使用法の大體を察し得べし。音韻兩拗聲相摩するときは、拗聲は韻に讓り、舌上音正齒音の外は、字母は皆直聲の形にて記することゝせり。

是より韻鏡を標準として漢吳兩音の還原法を試むべし、兩音次



清なく、濁、清濁吳音は韻鏡に從ひ漢音は濁を清とし清濁を濁とすること、又喉音曉母は漢吳兩音共に加行音を用ゐ、匣母は漢音は清、吳音は濁の加行音にて寫すこと、注意として之を再記す。還原法には夫々規則あれど、先づ漢音より始め、便宜上實例を以て之を示すべし。左に王之渙が涼州詞を例題として擧ぐ。

黃　クワウ（i'wong.　唐の韻は漢音アウの假名にて（ûng に當る。曉母匣母は漢音加行の假名を用ゐるに對し、官話は h を以て之を寫す。この h はわがク（k）の原音なるべし。韻尾のウは ng に當る。故にクワウの原音は（hwáng なり。

河　カ　iʔo.　歌の韻は漢音アの假名にて（a なり。河は匣母の音なり。カの原音は（há なり。

遠　ヱヌ　ywyén（yuén）.　兩音相近し。

上　シヤウ　ʑông.　養の韻は漢音 yáng の聲にて、シャウの原音

はsáng なり。

白　ハク　byák,　陌の韻は漢音韻鏡直拗の別あり。ハクの原音はpak, なり。

雲　ウヌ　(ywyín.　ウヌは(wun なれど、(ywin 又は(ywun の轉なるべし。

間　カヌ　(kyán.　山の韻は漢音直聲なれば、カヌの原音は(kán なり。

一　イツ　iit,　兩音相協ふ。

片　ヘヌ　p'ɛ́n)　韻鏡の方原音なり。

孤　コ　(ko.　兩音相協ふ。

城　セイ　(zeng.　清の韻は漢音の方直聲にして、セイの原音は(seng なり。韻尾ngを切りて、イを當てたるなり。

萬　バヌ　ṁwyɛ́n)(ṁwán)).　原音は vwyɛ́n)(vwán)) なり。



似　ジヌ　jin).　兩音相協ふ。

山　サヌ　(sán.　直拗の別あり。サヌの原音は(san なり。

羌　キヤウ　(k'yông.　陽の韻に屬し、原音は(k'yáng なり。

笛　テキ　dek,.　原音は tek, なり。

何　カ　(i'ó.　河に同じ。

須　シユ　(su.　原音は拗音(su なり。

怨　エヌ　iwyɛ́n)　兩音相近し。

楊　ヤウ　(yông.　陽の韻に屬し原音は(yáng なり。

柳　リウ　(lyiu.　原音は(liu なるべきか定かならず。

春　シユヌ　(ts'win (ts'un).　tsは佐行の假名にて寫すを例とす、韻鏡の方原音なり。

風　フウ　(fyung (fung).　尾音のウはngに當り、韻鏡の方原音なり。

不　フ（fyiu.　フの原音はヒウにして、韻鏡の方に近し。

度　ト（do).　原音はto）なり。

玉　ギョク　ngyok).　原音は本濁のgyok）なり。

門　ボヌ　（mwon.　原音は（bwon なり。

關　クワヌ　（kwyán.　直拗の別あり。クワヌの原音は（kwán なり。

次に**吳音**の原音を探るべし。わがいはゆる**吳音**には、六朝以後の者あり、又漢魏時代の古音あり。古音は素より**韻鏡**を以て律すべき者に非ずといへども、兩者の間に存する、大體の關係を知ることを得ば足れりとすべし。曹孟德が短歌行の一節を引いて例題と爲す。

月　グワッ　ngwyét).　グワッはギュチッの轉なるべし。この原音はngwyót なり。

明　ミヤウ　（myeng.　清の韻に屬し、原音は（myang なり。

星　シヤウ　（seng.　青の韻に屬し、原音は（sang なり。

希　ケ　（hyi.　曉母に屬し、原音は（hye なり。

烏　ウ　（wo.　原音は（wu なり。

鵲　ジヤク　tsʼók).　**吳音**は濁音にあらずして、次清正齒音のtsʼák なるべきが、古音或は**韻鏡**と同音のックなるべし。

南　ナム　（nám　兩音相協ふ。古音或はノム（nóm）なるべし。

飛　ヘ　（fwyi（fyi).　**吳音**はヒと呼べど、古音は（fye なり。

繞　ネウ　nyéu).　兩音相協ふ。

樹　ジユ　zu).　兩音相協ふ。

三　サム　（sám.　兩音相協ふ。古音或はソム（sóm）なるべし。

匝　サフ　tsáp）　古音或はソフ（tsóp）なるべし。

無　ム　（myu（mu).　兩音相協ふ。

枝　シ　（tsi.　**韻鏡**の方原音なり。古音或はセ（tse）なるべし。

可　カ　(k'ó.　哿の韻はáの聲にして、カの原音は(k'á なり。
依　エ　(iyi.　原音は(iyé なり。
山　セヌ　(sán.　兩音相近し。
不　フ　(fyiu.　フの原音は(fyu なり。
厭　エム　(iém).　兩音相協ふ。
高　コウ　(káu.　豪の韻はオウの聲なり。コウは(kóu なり。
海　ケ　(hái.　ケは(hé なり。
不
厭
深　シム　(sim.　兩音相協ふ。
周　シユ　(tsiu.　シユは(tsu なり。
公　ク　(kong.　クは(kung の ng を切りたる音なり。
吐　ツ　(t'o.　原音は(t'u なり。
哺　ブ　(bo.　原音は(bu なり。
天　テヌ　(t'én.　兩音相協ふ。
下　ゲ　(iyá　ゲは牙音の(gyé に非ずして、匣母なるが故其原音は(iyé なり。
歸　ケ　(kwyi.　原音はクェにして、(kwye なるべし。
心　シム　(sim.　兩音相協ふ。

以上は假名と韻鏡とを基礎として、推測を試みたる還原法なり。既に大半は消滅して、現時に存せざる、古音の痕を探らんとせば、素より精確を期すること能はず。只此法の幸に世人の用に供せられて、古代の音韻學研究の一助となるを得んことを希ふのみ。

## 第七章　韻鏡と假名遣

字音假名遣とは、漢音吳音に附する假名の使用法なり。漢音吳音

の由來、未だ詳かならざれども、其名稱の別は、平安朝の初期、延曆の頃より始まりたるものゝ如し。**漢音**とは即ち隋唐交通後洛陽長安の方より入りたる音を云ひ、**吳音**とは即ち江南吳地より傳はりたる音を云ふなり。然れどもいはゆる**吳音**の中に、漢魏時代の北音も雜り居れることは、考證の結果、明確と成り來りたれば、その**吳音**といふは、單に吳地の音のみに非ざるを記憶し置くべし。嚴密に言へば、六朝以前に渡りし音を古音、六朝以後吳地より傳はりし音を**吳音**、隋唐以後北地より來りし音を**漢音**と唱ふること穩當なるべし。

現今一般に行はるゝ所の**漢字音**は、我國の**漢音吳音**にして、其假名遣は、從來慣用せる、本居氏の**假字用格**、又は之を訂正せる白井氏の**假字用例**を參照するを可とす。太田氏の**漢吳音圖**は、其假名の別細密なれど、却て斷案に過ぎて、則り難き所多きを憾とす。

母韻の假名に混同を生じ易き者、概ね左の三類なりとす。

第一類。

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 一部 | アウ | カウ | サウ | タウ | ナウ |
| 二部 | オウ | コウ | ソウ | トウ | ノウ |
| 三部 | アフ | カフ | サフ | タフ | ナフ |
| 四部 | オフ | コフ | ソフ | トフ | ノフ |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 一部 | ハウ | マウ | ラウ | ワウ | |
| 二部 | ホウ | モウ | ロウ | ヲウ | |
| 三部 | ハフ | | ラフ | | |
| 四部 | ホフ | | | | |

第二類。

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 一部 | ヤウ | キヤウ | シヤウ | チヤウ | ニヤウ |
| 二部 | ヨウ | キヨウ | シヨウ | チヨウ | ニヨウ |
| 三部 | エウ | ケウ | セウ | テウ | ネウ |
| 四部 | エフ | ケフ | セフ | テフ | ネフ |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 一部 | ヒヤウ | ミヤウ | リヤウ | | |
| 二部 | ヒヨウ | | リヨウ | | |
| 三部 | ヘウ | メウ | レウ | | |
| 四部 | | | レフ | | |

第三類。

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 一部 | ユウ | キュウ | シュウ | チュウ | ニュウ | リュウ |
| 二部 | イウ | キウ | シウ | チウ | ニウ | リウ |
| 三部 | イフ | キフ | シフ | チフ | ニフ | リフ |

韻鏡の諸轉に屬する、諸韻に當てたる羅馬字の傍に附したる假名と、漢音吳音の假名と、對照するときは、容易く相互の關係を察し得べく、其間に時に直拗相轉ずることあるを見るべし。但し普通の假名遣にては、第一轉は、二等、三等、四等共にュウ、第二轉は、三等、四等共にョウ又ュウ、第三十一轉は、一等アウ、二等、三等、四等共にアウ又ャウ、第三十二轉は、一等ワウ、三等ワウ又ャウ、第二十五轉は、二等アウ又ェウの假名と心得置くべし。

第一類、第一部、アウの音を有する諸轉。

第三轉、二漢、第二十五轉、一漢、第三十一轉、第三十二轉、一漢、二吳、第三十三轉、二漢、第三十四轉、二漢、吳、第三十六轉、二漢、吳、第三十一漢、吳、第三十七轉、一漢、第四十二轉、一吳、三、牙、喉吳、四吳、第四十三轉、一漢、吳。

同第三部、アフの音を有する諸轉。

第三十九轉、第四十轉、一漢、二漢。

同第四部、オフの音を有する諸轉。

第三十八轉三脣、牙、喉吳。第三十九轉、第四十轉、一吳、三脣牙喉吳、第四十一轉、三吳。

第二類、第一部、ヤウの音を有する諸轉。

第三十一轉、二吳、三（脣を除く）漢、舌、齒、半舌、半齒吳、四漢、第三十二

轉、三牙漢、第三十三轉、二、三、四吳、第三十四轉、三、四吳、第三十五轉、三、四吳、第三十六轉、四吳。

同第二部、ョウの音を有する諸轉。

第二轉、三（脣を除く）漢、四漢、第四十二轉、二漢吳、三漢、脣、舌、齒吳、四漢。

同第三部ェウの音を有する諸轉。

第二十五轉、二吳、三、四漢吳、第二十六轉、四漢吳。

同第四部、ェフの音を有する諸轉。

第三十九轉、第四十轉、二吳、三漢、舌、齒吳、四漢吳。

第三類、第一部、ュウの音を有する諸轉。

第一轉、二漢、三（脣を除く）漢、四漢、第二轉、三（脣を除く）吳、四吳、第十二轉、三、四漢。

第二轉と第十二轉とは、重をヂュウ、從をジュウ、龍をリュウ、勇をユウ、主をシュウ、誅をチュウ、裕をユウと響かすが如く、延音となりたる場合のみなり。

同第二部、イウの音を有する轉。

第三十七轉、二、三、四漢。

同第三部、イフの音を有する轉。

第三十八轉、二漢吳、三漢、舌、齒吳、四漢吳。

次に混同を生ずる恐あるは、阿行のィェオと、和行のキェチとの、發聲を有する音の假名遣なり。是は影喩兩母開合の別に由りて、直ちに決することを得べきが故、疑あらば其字所屬の轉につきて正すべし。

多行濁音の假名と、佐行濁音の假名と、混ずる恐あるときは、多行の方は舌音、佐行の方は齒音又半齒音と心得れば、判別すべし。

## 第八章　韻鏡と反切法

韻鏡は反切の書に非ざるが故、之と直接の關係あることなし。然れども韻鏡を以て反切の音を正し、反切を以て韻鏡の音を探るときは、兩者相佐け相補ひて、間接の關係を保つこと甚だ多し。元來反切は脣弄を以て音聲を辨ふる便法なりしが、時代の進むに隨ひて、音聲次第に轉化し來り、古音はその時代時代の音を以て律し難き所多きに由り、遂に後世切韻圖を作り、煩雜なる門法を設けて是が說明を試むるに至れるなり。

玉篇、唐韻、廣韻、集韻は、韻鏡と對照するときは、異例多からず。左に反切の數例を出たし、韻鏡に由りて、歸字の音を定むべし。

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 徒 | d(o) | 計 | (k)ɕi | 切 | 締 | 玉篇 |
| 徒 | 第十二轉、舌頭音濁定母。 | | | | | |
| 計 | 第十三轉、去聲四等霽韻。 | | | | | |
| 旁 | b(ông) | 陌 | (m)yak | 切 | 帛 | byak　唐韻 |
| 旁 | 傍と同じく第三十一轉、脣音濁並母。 | | | | | |
| 陌 | 第三十三轉、入聲二等韻。 | | | | | |
| 息 | s(ok) | 弓 | (k)yung | 切 | 崧 | sung　廣韻 |
| 息 | 第四十二轉、細齒頭音清心母。 | | | | | |
| 弓 | 第一轉、平聲三等東韻。 | | | | | |
| 第一轉平聲には、細齒頭音に對する三等字なし、故に歸字は心母に伴ひて四等に下り、嵩と同音と爲る。 | | | | | | |
| 七 | ts'(it) | 入 | (j)ip | 切 | 惺 | ts'ip　集韻 |
| 七 | 第十七轉、齒頭音次清清母。 | | | | | |
| 入 | 第三十八轉、入聲三等緝韻。 | | | | | |

此度は第三十八轉入聲に、齒音次清に對する三等字の位置あり、されど此位置にては、直音の清母は、拗音の穿母に變はらざるを得ず、故に是も亦三等より四等に下り、緝と同音となるべ

きこと自然なり。

| 居 | 寒 | 切 | 奸 | 韻會 |
|---|---|---|---|---|
| ky(o) | (i)ián | | kán | |

居　第十一轉、牙音清見母。

寒　第二十三轉、平聲一等韻。

右音字居は拗聲の三等字なれど、一等韻は拗聲を許さゞれば、奸は一等に位して、干と同音と爲る。廣韻にては奸は古寒切なり。

右廣韻、集韻、韻會の三例は、應用を示さんがため、特に普通の反切と稍異なりたる者を取り出だしたるなり。

韻鏡の圖面に記載せる字は、各字各音を代表せる者なり。此代表字と同音の者を知らんとせば、反切の力を借ること甚だ便なり。前五例に出だせる、締帛崧惺奸は、圖面に現はれざる字なれど、反切に由り、右は代表字第白嵩緝干と同音なることを知り得べし。

此の如き方法を用ゐて探求せば、天下數萬の字も其音を正し得ること難きに非ざるべし。尙數例を擧げて參考と爲すべし。

紅　廣韻戶公切。　韻鏡第一轉、喉音匣母、平聲一等東の韻に屬し、洪と同音。

厄　廣韻章移切。　韻鏡第四轉、正齒音照母、平聲三等支の韻に屬し、支と同音。

率　唐韻呂戌切。　韻鏡第十八轉、半舌音來母、入聲三等術の韻に屬し、律と同音。

院　集韻于眷切。　韻鏡第二十四轉、喉音喩母、去聲三等線の韻に屬し、瑗と同音。

家　集韻居牙切。　韻鏡第二十九轉、牙音見母、平聲二等麻の韻に屬し、嘉と同音。

鑿　廣韻在各切。　韻鏡第三十一轉、齒頭音從母、入聲一等鐸の

韻に屬し、昨と同音。

畝　**廣韻**莫厚切。**韻鏡**第三十七轉、脣音明母、上聲一等厚の韻に屬し、母と同音。

貪　**廣韻**他含切。**韻鏡**第三十九轉、舌音透母、平聲一等覃の韻に屬し、探と同音。

韻書の反切と**韻鏡**と相協はざる場合には、兩者其音を異にするものと悟るべし。

恚　**廣韻**、**集韻**共に於避切にして、開口音なり。**韻鏡**第五轉、喉音影母、去聲四等寘の韻に屬して、合口音なり。兩者開合相合はず、**玉篇**の於睡切は**韻鏡**に協ふ。

陂　**廣韻**彼爲切、**集韻**班糜切にして、韻字に由るときは、合口音となる。**韻鏡**第四轉、脣音幫母、平聲三等支の韻に屬して、開口音なり。兩者開合相合はず、**玉篇**の彼皮切は、**韻鏡**に協ふ。**磨光**に陂の類、糜の類を、第五轉に移したるは、私に**韻鏡**を改めたるものなり。



**韻**　**玉篇**爲鎮切。**韻鏡**に此格なし。是は**廣韻**、**集韻**の王問切に從ふべきか、然るときは、第二十轉、喉音喩母、去聲三等の運と同音と爲る。或は**集韻**の筠呴切に從ふこと可なるべし。第十八轉、去聲三等に此字を置き、其位を保たしむれば、上聲三等の殞と能く相對す。尤も爲鎮切の音字を本位とすれば、歸字は合口音となりて、此格に協ふ。韻は韵とも書し、其古文は均なり。韻の音は ywyin 即ち yuin なるべし。韻殞運の今の支那音は yun なり。**磨光**は**玉篇**の反切の歸字を開と斷じて、韻を第十七轉の中に置けど、之を第十八若しくは第二十の、合轉の方に移すべきは當然なり、然るときは其假名はキヌ又ウヌなり。

濾　**廣韻**鉏銜切。**韻鏡**第十七轉に此歸字に當るべき處、空位

なり。**磨光**其他數本、之を二等に擧ぐるは取らず。**玉篇**慈忍切にして、盡と同音なり。今之に從ふ。同轉に屬する親も、親と同音なるべし。**廣韻**の初覲切に從ひて、之を二等に置くは取らず。

凭　**廣韻**扶冰切にして、輕脣音なり。　**韻鏡**第四十二轉、脣音並母、平聲三等蒸の音に屬して、重脣音なり。　兩者脣音輕重相合はずして別音と爲る。**集韻**の皮冰切は**韻鏡**と相協ふ。

吉　**廣韻**居質切にして、**韻鏡**に照せば、音字三等、韻字三等にして、歸字は三等に位すべし。　**韻鏡**にては、第十七轉、牙音見母、入聲四等質の韻に屬す。　兩者拗直相反す。**玉篇**は居一切、音字三等韻字四等、**集韻**は激質切、音字四等、韻字三等にして、共に兩者の間に當るべき音と爲る。

右の諸例にて、**韻鏡**と諸韻書との音の關係の大要を察し得べし。尙詳細は**翻切要略**に讓る。兩者の差異ある所は、別に說明すべし。

# 韻鏡音韻考　終

明治四十五年五月廿八日印刷
明治四十五年六月一日發行

韻鏡音韻考
定價金五拾錢

著作者　大島正健

發行兼印刷者　株式會社啓成社

代表者　遠藤國次郎

印刷所　株式會社秀英舍工場

不許複製

發賣所　東京市日本橋區本銀町三ノ二　株式會社啓成社　振替口座東京一二〇五五番

發賣所　東京市神田區裏神保町一　三省堂　振替口座東京一五九七番

大島正健先生著書

韻鏡音韻考　全一冊　定價金六拾錢　郵税金六錢

改訂韻鏡　全一冊　定價金五拾錢　郵税金六錢

翻切要略　全一冊　定價金參拾錢　郵税金六錢

發賣所　日本橋區本銀町三丁目二番地　株式會社啓成社

發賣所　神田區裏神保町一番地　三省堂

342
26

344
26

終